第 14 回

世界オリエンテーリング選手権大会

報　告　書

1991年8月20日～25日

CZECHOSLOVAKIA

— MARIANSKE LAZNE —

ご あ い さ つ

第１４回世界選手権大会
日本チーム団長　　橘　直隆

「今年の日本チームは何かやりそうな気がする」　出発前に何度か耳にした言葉です。私自身も決して楽観はしていないものの、いままでと少し違う雰囲気を感じていました。なぜなら、軌道に乗りはじめたナショナル・チームの活動により、この２年間は以前より多くの選手が世界選手権を目指してハードな練習をしてきたことや、それによりシビアになった代表選考会を突破してきたことなどが、代表選手の自信の裏付けになっていると感じられたからです。そして、若手の大学生３名がこの難関を突破して代表に選ばれ、チームの雰囲気をフレッシュなものにしたことも、その理由のひとつでしょう。２名の大学生が５月から北欧に長期遠征する一方、国内組は５月から３回の合宿を組み、大会に備えました。

さて、世界選手権での優勝は個人ショートは男女ともチェコスロバキア、個人クラシックは女子ハンガリー・男子スウェーデン、リレーは男子スイス・女子スウェーデンと大陸勢の活躍が目立ち、北欧強国のノルウェーには個人種目で５位以内の選手がいないという予想もしなかった結果になりました。日本チームは、世界の中ではまだまだ弱小ですが、最も重要視しているリレーでは、男子は前回の順位をうわまわり、女子は念願の最下位脱出を果たして、最低の目標は達成することができました。そして、優勝チームとのタイム比率を減少させるという日本チームの確かな向上がみられ、代表チームに関わるものとして大きな喜びを味わうことができました。これらの結果以上に満足していますのは、男子が最後まで他チームと競り合うことができたことです。これを選手達は「中堅国の背中が見えた」と表現していますが、今回の活躍が日本チームの心のどこか奥底にある劣等感を排除するキッカケになり、今後の飛躍のスタートになってくれればと願っています。

しかし、これらの成果が私達日本代表メンバーだけの力で成し得たわけではありません。日頃から我々の活動にご理解とご援助をいただいている皆様のおかげだと深く感謝しています。特に、今回の遠征に多額の賛助金をおよせいただいた皆様に、厚くお礼を申しあげます。また、代表選考会にご協力いただきました三河オリエンテーリングクラブ・静岡県オリエンテーリング協会・静岡大学オリエンテーリングクラブの皆様、チャリティー・ショート大会を企画・開催してくださった山川氏と役員の方々および参加者の皆様、資金集めのためのビデオテープを購入してくださった皆様、代表選考会の役員をしてくださった皆様、チェコまで応援に駆けつけてくださった皆様、いつもナショナル・チームの合宿を支えてくれるチームスタッフとチームメンバー、選考会を盛り上げてくれた多くのエリート選手、そして、賛助会員の募集事務を一手に引き受けてくださった斉藤氏に厚くお礼申し上げます。

次回の世界選手権は1993年にアメリカ東部で開催されます。今大会中に広報された開催地近くの地図によりますと、テラインは北欧を思わせる氷河地形でした。日本と比較的よく似た大陸的な地形を得意とする日本選手には、地形に慣れるまで頭を悩ませることも多いと思いますが、今回の経験を選手強化・育成に生かして今回の成績を上回る成果をあげるべく、これから２年間なお一層の努力をする所存です。今後とも、微力ながら世界を目指すナショナル・チームに皆様の大きなご協力をお願いいたします。

目　次

日本選手団名簿・日程 ---------- 1
会計報告 ---------- 1
トレーニング・キャンプ
　バルコバにおける最終トレーニングキャンプについて --- 藤井　範久 --- 2
　住めば都のBalkova ---------- 宮本知江子 --- 3
大会の周辺と日本チームあれこれ
　マリアンスケ・ラーズニェと選手村での生活 ---------- 福士　淑子 --- 3
　走る以外の世界選手権 ---------- 村越　真 --- 4
　マネージャーの２年間 ---------- 村越　久子 --- 5
　無責任な「オフシャル・ウワッチング」 ---------- 出田　裕子 --- 6
　長期海外遠征をして思うこと ---------- 鹿島田浩二 --- 7
個人ショート・ディスタンス
　チェコスロバキア国歌、２度流れる ---------- 丸山　哲史 --- 7
　個人ショートを走って ---------- 出田　裕子 --- 8
　ショート・タイプの恐さ ---------- 村越　真 --- 9
個人クラシック
　個人クラシックレース（女子）観戦記 ---------- 木植　早生 --- １０
　個人Ｌｏｎｇレース ---------- 宮川　祐子 --- １１
　個人クラシックレース（男子）観戦記 ---------- 中村弘太郎 --- １２
　不満足の中の満足　～　やっと個人戦が走れて ---------- 吉田　勉 --- １３
　個人戦レース記 ---------- 鹿島田浩二 --- １４
リレー
　リレー観客としての長い長い一日 ---------- 宮川　祐子 --- １４
　リレーに参加して　～　１走の思い ---------- 木植　早生 --- １６
　リレーの禁句・・・「ゴメンネ」 ---------- 宮本知江子 --- １７
　リレーを走って ---------- 福士　淑子 --- １８
　変わりつつある流れの中で　～　男子リレー観戦記 ---------- 吉田　勉 --- １９
　はじめての世界選手権リレー ---------- 中村弘太郎 --- ２０
　男子リレー報告 ---------- 山岸　倫也 --- ２１
総括
　女子コーチとして ---------- 山岸　倫也 --- ２２
　男子コーチは何をしていたのか？ ---------- 村越　真 --- ２３
　ヘッドコーチとして ---------- 橋　直隆 --- ２４
成績表
　個人ショート・ディスタンス ---------- ２６
　個人クラシック ---------- ３０
　リレー ---------- ３２

＊　この報告書では、世界選手権の略称として我々が日常使っているＷＭ（ヴェー・エム：Welt Maister：独語）を使いました。一般的にはこの他に、ＷＯＣ（英語）やＶＭ（スウェーデン語）が使われることもあります。

日本選手団 名簿および日程

日本選手団 名簿

選手　出田　裕子
　　木植　早生
　　宮川　祐子
　　宮本知江子
　　福士　淑子
　　山岸　倫也（兼、女子コーチ）
　　村越　　真（兼、男子コーチ）
　　吉田　　勉
　　中村弘太郎
　　鹿島田浩二
役員　橋　　直隆（団長、ヘッドコーチ）
　　村越　久子（マネージャー）
　　藤井　範久（女子コーチ補佐）
　　丸山　哲史（男子コーチ補佐）
　　国沢　五月（キャンプのみ）

日程

8月10日～14日　選手役員集合
　11日　レース参加
　12日　トレーニング
　13日　トレーニングレース
　14日　トレーニング
　15日　トレーニング、観光
　16日　トレーニング
　17日　トレーニング
　18日　トレーニング
　19日　世界選手権宿舎へ移動
　20日　モデルレース、開会式
　21日　ショート予選、決勝
　22日　モデルレース
　23日　クラシック決勝
　24日　トレーニング、休養
　25日　リレー、閉会式、選手役員解散

会計報告

支出

世界選手権エントリー・フィー（宿舎費を含む）	799,518円
トレーニング・キャンプ宿舎費	302,198円
トレーニング用地図	12,900円
交通費（レンタカー、ガソリン）	420,940円
チーム・ユニフォーム	247,613円
競技用ユニフォーム（トリムテックス）	103,037円
チーム・エンブレム（胸マーク）	13,800円
雑費（通信費、追加食費、謝礼、換金手数料等）	57,368円
計	1,957,374円

収入

賛助会費	1,032,000円
ビデオテープ頒布収益	320,723円
チャリティー・ショート大会開催者より	140,000円
選手役員個人負担	420,000円
雑収入	8,800円
ＳＱＵＡＤより	35,851円
計	1,957,374円

○　渡航費および集合前解散後の経費は個人負担です。
○　9月1日以降の収入はＳＱＵＡＤに繰り入れます。

トレーニング・キャンプ（8月10日～18日）

バルコバにおける最終トレーニングキャンプについて

藤井　範久

今回の世界選手権にむけての最終トレーニングキャンプがバルコバ（Balkova）という場所で行われた。ここはサマースクールが行われる場所で、日本で言えば林間学校のようなものであろうか。２人に１部屋（２段ベッド×２，机，椅子）が与えられ、また同じフロアーには絨毯が敷いてあるミーティングルームもあり、非常に快適なトレーニング生活を送ることができた。シャワー、トイレなどは他の国の選手と共同であったが特に問題はなかったように思われる。また食事は、オーガナイザー側から提供されるものであったが、質・量とも本番のホテルのものより良かった（最初は野菜が少なかったが、リーダーミーティングで要望を出すと、翌日には野菜が大量に出る様になっていた）。

このバルコバにある宿舎をベースとして、近くに車で10分のところに「TIS」、30分の所に「PETOHRAD」,「VIKLAN」,「SKALKY」,「BOR」のテラインが用意されていたが、「TIS」のテラインを中心にトレーニングが行われた。

今回はメンバーが一度にバルコバに集まったわけではなく、鹿島田，中村，出田，丸山，藤井が８月10日から、村越，吉田，木植，宮川，福士，宮本，が13日から、橘，山岸，国沢が14日から参加する形となった。トレーニングキャンプの内容を日を追って簡単に説明していくことにする。

●10日。プラハでレンタカーを借りて鹿島田，中村，出田，丸山，藤井が宿舎入り。宿舎の近くを軽くジョグしていると、オーガナイザーが車でやってきて「この辺りはお前達には dangerousだ！」と言ってくる。後で分かったことであるが、この宿舎周辺（特に宿舎の南側）が個人戦のテラインになっており、もし知らずにテラインに入ったとしても、それが露見すれば失格になるかもしれないということで dangerousと言っていたのだ。

●11日。チェコスロバキア・ショートＯ選手権に参加。５人全員あっけなく予選落ち。午後は水泳。またこの日、トレキャンプ中のホストを勤めてくれた「サティー君」と会う。

●12日午前。「TIS」のテラインで地図と現地のイメージ合わせ。切り開き，溝，岩，岩崖など日本のイメージとは合わないものがあるが、しっかり確認する。午後は、２日前に同じテラインで行われたチェコスロバキア選手権大会の女子選手権コース(11km)を走る。出田はこのコースを２時間強。

●13日午前。「BOR」のテラインでチェコスロバキア・ショートＯ選手権の男子決勝コースを走る。この日、昼食を食べに宿舎に戻ると村越が一人で来ていた。テラインに早く入りたかったそうで、同じ日にレンタカーを借りて一緒に来るはずだったメンバーを後で迎えに行くことになる。また午後から Super-Sprint という遊びのようなトーナメント制のレースがあり、鹿島田，中村，丸山が参加、鹿島田は１，２回戦と勝ち進んだものの３回戦で優勝した選手に破れてしまう。この日の夜、吉田，木植，宮川，福士，宮本が到着。

●14日午前。「SKALKY」のテラインで地図と現地のイメージ合わせ。午後は、本番のテラインに似ていると噂されていた「TIS」で 各自でトレーニング。この日の午後、橘，山岸が合流、さらに参加が危ぶまれていた国沢もバスと徒歩で宿舎入り。これでトレーニングキャンプのメンバーが全員そろう。

●15日は、ビールで有名なPLZEN（ピルゼン）の近くのテライン「KRKAVEC」に出掛ける。３Km×２のレースを行い，タイムの比較を行った。また午後はビール工場の見学。

●16日。「PETOHRAD」のテラインで３Km×２のコースを走る。男子は２本目をリレーの練習を兼ねて同時スタートのファシタ。ホストのサティー君も参加したが、国沢についで２位でゴール。日本にいればトップエリートの仲間入り間違い無し。午後は休養。一部のも

のは、観光に出かけた。
●17日。「VIKLAN」のテラインで男子は６Km、女子は４Kmのコースを走る。またクラシックレース（個人戦）に参加予定の吉田，鹿島田，出田，宮川はさらに続けて４Kmのコースを走る。さらに夕方、ジョグに出掛けたグループもいた。
●18日。仕上げのつもりで再び「TIS」のテラインで３Km×３のコースを走る。
●19日は、11時頃から世界選手権が行われるマリアンスケ・ラーズニェに移動。それまで「TIS」のテラインでジョグやコースを回ったりして時間を潰す。

このように今回のトレーニングキャンプは、全体としては短いコースを何本か走ることを中心としたトレーニングであるが、クラシック参加予定者は長いコースを走るトレーニングも行い、またショートとリレーのみの参加者も時間があれば用意されたメニュー以外にもテラインの中で独自にトレーニングを行っている。１日平均男子で15Km、女子でも10Km程度のトレーニングをしていたであろう。また今回は、２年前のスウェーデンとは異なり地形が日本と似ているため、テラインへの対応に時間を費やすことなく、非常に充実したトレーニングを行うことができたものと考えている。

住めば都のBalkova

宮本　知江子

列車もバスも通っていない、そんな田舎がキャンプ地である。こんな情報しか私たちは得ていなかった。実際そこは、最も近い村から数キロもある谷間に忽然と建てられた林間学校だった。入り口から暗い廊下をくねくねと入って行った Objekt12 という一角が日本チームに割り当てられていた。先生部屋がひとつ、あとは子供用の二段ベッドが入った４人部屋だった。それぞれの部屋に２人ずつ入ってバルコバでのトレキャン生活が始まった。

１４日に立てた全体のトレーニングプランを使って、各々自分の出場種目にあわせ自主的に調整を行っていった。食事時間は、朝・昼・夕とも厳密に決められていて、特にディナーである昼食に私たちは照準を合わせ、時間厳守の規則的な生活が続いた。だってデザートの数に限りがあったのですもの、ねえカッシー。初期に風邪でダウンしていたコータロー君を除いて、他のメンバーは次々と新しいテラインとマップをこなし、特に本番テラインに最も近いといわれた「TIS」では ユーさんとイズタさんがごきげんだった。その反面、ヨッちゃんと私はヤブとの格闘でイメージがつかめず悶々としていた。それでも午後に Plzen ビール工場見学を控えた日のトレーニングでは、みんなさわやかな汗を流し、森の中で待っている藤井さん（サナエさんが連絡なしに先に帰ってきてしまった）を、リンヤさんとシンさんが足に傷をつけながらも短パンで呼びにいくハッスルさ。

私も５日間に７回山に入り、１日８kmは走った。キャンプが終る頃には全員チェコの森を理解し、好きになっていた。石ころころの急斜面を除けば・・ね。若者は口を揃えて長く辛かったと言ったトレキャンプ。スロースターターの私が少しずつ登り調子になった頃、充実感と期待を胸に、あのあけ広げのシャワールームや食堂のおばさんに別れをつげた。

大会の周辺と日本チームあれこれ

マリアンスケ・ラーズニェと選手村での生活

福士　淑子

今回のＷＭは西ボヘミアに位置する（プラハから西へ１６０㌔）マリアンスケ・ラーズ

ニェで開催されました。ここはヨーロッパでも最も景色のよい温泉保養地として知られ、実際、中世風の美しい建物が立ち並ぶ落ち着いたたたずまいの町でした。町の中心には中世の建築様式にのっとった近代的な横長の建物のコロナーデがあり、療養のための温泉飲み場になっていて、数種類の温泉を観光客も試飲でき、湯治客や観光客の憩いの場となっていました。コロナーデの周りは広々とした公園、また温泉の飲める時間帯にはミニコンサート、そして時間とともに変化する美しい噴水（夜にはライトアップされる）と優雅な雰囲気をかもしだしていました。

19日に私達が着いたとき、町は既にＯＬ色にあふれ、文房具店や洋品店のショーウィンドウにもポストフラッグが飾られ、もちろん至る所に大会ポスターは張られ、見上げると高級ホテルのバルコニーにトリムやレガースがはためいているといった妙な光景が町のあちこちで見受けられました。

20日の開会式は夜７時半に例年のように各国選手団のパレードでの幕開け。あいにくの雨模様で傘を持っての行進となり、先頭で奏でられているマーチもよく聞こえずダラダラ歩きになってしまいました。（この天気を予想してか、お揃いのレインコートに長靴というチームもありました）　前回のスウェーデンよりは、やはり地味だったようですが、沿道やホテルの窓から声援を受け、和気あいあいとした雰囲気。式は例のコロナーデで行われ、清澄なファンファーレに続き、関係者の挨拶、開会宣言、とアトラクションもなく形式的なものでした。冷たい雨で体が冷えた上に、翌日朝９時からショート予選だったこともあり、すぐにお開きムードでした。

23日、クラシックの表彰式後に行われたバンケットは、山の上のホテルでのガーデンパーティーで、子ども達による合奏、ダンスホールでのバンド演奏、また報道陣によるミス＆ミスターＷＯＣのノミネートなどの企画で盛り上がりました。各国チームがお揃いのセーター・ワンピースでのおしゃれ姿で、レース時とは違った表情でくつろいでいる様子でした。

私達選手団は、イベントセンター（アイスホッケー体育館）のすぐ脇の丘の上のホテルに入り、陸の孤島のようなトレーニングキャンプとは全く異なった環境での生活になりました。（どちらが快適かは一概に言えない面もありましたが）　ホテルにはプールやサウナやカフェがあり、他の設備も整っていて現地ではかなり高級なホテルのようでした。ペースを崩されてしまったのが毎回の食事で、昼食・夕食は一皿ずつ給仕され、１時間はたっぷりかかる優雅なものでした。でも、おいしいビールには皆さんご機嫌の様子でした。

余暇時間はそれぞれショッピングに、観光に、ジョギングに、スイミングにと様々でしたが、レースの合間のくつろぎの場として、マリアンスケ・ラーズニェは趣きのある素敵な町でした。

走る以外の世界選手権

村越　真

選手として参加していた世界選手権（ＷＭ）から一歩踏み出し、コーチとして、あるいはＯＬを運営する立場に片足を突っ込むようになると、選手の視点からは見えなかったＷＭの一面が見えてくる。ＷＭは決して世界一を決めるだけの大会ではないのだ。

ＷＭは、だいたい６日間の日程で開催されるが、そのうちレースがあるのは３日間だけである。レースのない日には、なんらかの会合が予定されている。たとえば２年に一度開催されるワールドカップについての会合がおこなわれ、各主催者によって大会のＰＲがなされたり、細かい日程や選手移動に関しての話合いがもたれる。またカレンダー・コンファレンスといって、この先２年間に開催される各国の国際大会の日程調整や協議のための

会合も開かれている。

こうした公式の会合に限らず、WMは各国の主導的な地位にある人々が集まる場であり、そこで様々な情報交換がなされる。集まった人々は、会合でレース会場で、あるいはミーティング・ルームで出会い、とりとめのない雑談をし、ある時は具体的なプロジェクトについての話を進める。そうして、なんらかの流れが漠然と形成されてゆく。WMというレース自体は、その人たちが集まるためのダシに過ぎない。

8月22日の午前中。私と山岸は、モデルコースに行くのをサボッて街を歩いていた。そこでバッタリとハバロフスクのドローニン氏と会い、「APOC92」に関する、選手交換やソ連からのマッパー派遣についてのかなり具体的な話をつめることができた。ペレストロイカ以後、ソ連は積極的に海外のOLに参加するようになったし、スウェーデンの「SPORT&MOTION社」と組んで、極東地区でのOL普及活動を始めようとしている。それは私たちにも、大いに関係することなのだ。WMで出会うことによって、そういう活動に参加する一つの道が開けたと言えるだろう。

日本もいずれはワールドカップなどの主要な国際大会を開催することになるだろうが、その開催にしても、複数の国が協同して一つの節（シリーズ）を受け持つようなシステムになっている。互いに情報を交換しあっていなければ、国際的な協力など不可能だし、大きな流れから取り残されることになってしまう。WMとは、世界のOLの流れを感じ、そこにコミットしてゆく格好の場でもあるのだ。今回はマップセミナーがあり、地図作成の新しい流れとして、コンピューターマッピングが話題にのぼった。またWM後には、科学グループ主催のシンポジウムも企画されている。

観客のためのレースが85年に開催されるようになって以来、WMは走る選手のためだけのものでなく、OLのどんな側面であれ興味ある人にとって、非常に興味深い場といえるだろう。

マネージャーの2年間

村越　久子

1989年8月スウェーデンでの世界選手権が終ったときから、いやその前からも少しずつではあるが今回の準備が始まっていた。情報を集め、チームが安心して参加できるようにすることである。うまくいったか？　というと「No」。前よりはましだったけど。そんな評価しか下せないのが残念である。

今回からショート・ディスタンスが正式種目となった。ショートとはどんな競技なのか？なぜ世界選手権に入って来ることになったのか？　知りたかった。正式種目に決定される世界会議に出席（当然意見を出さずに聞いているだけ）出来るよう準備していたのに、『資格』がないからとの理由で行けなかった。誰かが行って情報を持ってきてくれたかというと、もちろん否である。

チェコは2年前に突然「民主共和国」に変身してしまった。世界選手権が開かれるのだろうかと心配したが、ブリテン1［ブリテンは主催者からの大会全般に関する正式連絡冊子で、定められた期日に1から4まで順次発行される：編集者註］こそ遅れたものの、変身パワーを世界選手権にも注いだようである。ブリテン2が9月に、前回入手出来ずに泣かされたルールブックが11月に送られてくるはずだというのに、JOAに尋ねても来ていないという。ショートの形式がわからなければ代表選考会にも影響が出てしまう。仕方なく、ルールブックは直接主催者に連絡して取り寄せることにした。エントリー〆切り直前にブリテン2がやっと回送されてきた。しかし、エントリー用紙がなかったのでチェコに連絡すると、「とっくに協会あてに送ってあるはずです」の一文が添付された用紙が

ＦＡＸで送られてきた。チェコからなんとＦＡＸで直接来るなんて・・と感激！

この点さえクリアできれば、あとは大きなトラブルもなく準備ができた。湾岸戦争の影響で航空券の予約も順調だったし。チェコの情報が少なくて、現地に行かないとどうなるかわからない・・・は、いつものことだから。

チェコでは、チーム・オフィシャル（役員）４名のチームワークは最高で、ミーティングをもたなくても各々の仕事をこなしていた。ただ、チームのホスト役だったペテルカ氏と私たちの、ホストの役割についての認識が少しずれていて、困ってしまったこともあった。また、ソ連のクーデターの情報を耳にして、アエロフロート（ソ連の航空会社）を予約していた人は帰れるのだろうかと、情報の少ないチェコでオロオロした場面もあったが、予定通り無事全員帰国。日本としては大きな進歩を残してＷＭ91が終った。そう、そして、ＷＭ93の準備はもう始まっている。

●ショートのスタート順抽選は、なんとコンピュータだった。その手順は、

1)初めの乱数を入力（会場のエライ人３人が数字を言う）

2)国を５ブロックにわける（５コースに５人出場の国はよいが、少ない国は人数に偏りがないように、うまく振りわけられる）

3)各ブロック毎に、国名でスタート時刻を割り振る

4)国名の時刻にその国の出場者を割り振る

●自分と同じ状況のためか、小さい子供が目についた。オーストリアのある人は２人の子連れ。１人は８ケ月くらい。　個人４位のマリタ・スコグン（スウェーデン）は９月に、同じく３位のヤナ・ガリコバ（チェコ）は11月に出産したそうだ。ヤナはトレーニングは２ケ月だけと答えるが、本当は５ケ月のトレーニングをしている。でも、初めの３ケ月は体がよく動かなかった・・・。よくわかる私。

●いつもはニコニコと笑ってくれるだけのフィンランドのコーチが、リレーの日に「なかなかやるネー」と向こうから声をかけてくれた。うれしかった。

●今回も大勢の方々に有形無形の援助をしていただきました。ありがとうございます。

無責任な「オフィシャル・ウワッチング」

出田　裕子

〈その１、もしオフィシャルがいなかったら〉

チーム・オフィシャルというのは、選手団のうち、選手以外を指すわけですが、「団長」や「コーチ補佐」という肩書がついていても、仕事の中心は「世話役」的仕事です。

もし選手だけで遠征したとしたら、例えば主催者や宿との交渉、情報入手、会計のこと、食事のこと、諸手続き、トレーニングの準備、その他様々な雑事を、すべて自分達でやらないといけないことになります。選手がそういうことに頭を痛めると、レースに集中できず、こういう仕事を専任でやってくれる人が欲しい！　と切望することになります。

ＷＭでは、これまでも、有能なオフィシャルがついて下さっていたのですが、今回も超有能な方ばかりで、選手は心おきなく競技に打ち込むことができました。

〈その２、オフィシャルはストイック〉

パブリックレースのことを例にあげます。オフィシャルは、ＷＭのレースの合間の日に行われるパブリックレース（応援者などの一般人を対象とした大会）に、出ようとすれば出られるのですが、今年はエントリーすらされなかったようです。前回のＷＭで、オフィシャルがパブリックレースに出たために、Ｂファイナルの選手に付添いがなかったことを非難げにいう人がいたせいでしょうか。私は、オフィシャルの方々も、少しくらい楽しんで下さったらいいと思うのですが・・・「自分の楽しみ」は考えない、少なくとも前面に

出さないようにしておられましたね。こっそりと（？）オフの日に、３日前に行われたショート予選のコースを走りに行かれた橋さんの姿には、心打たれるものがありました。
〈その３、オフィシャルの苦悩〉
選手の前には、あまり苦しんでいる姿は見せなかったオフィシャルですが、こんなこともあったようだ、というのをいくつか。
●今回のＷＭは、日本チームまでなかなか情報が伝わってこなくて、日本での交渉窓口のチャコは、特に苦労したんじゃないでしょうか。
●第一陣のレンタカー事件（日本からの予約が届いていなかった）では、哲史・藤井両氏の髪が薄くなったようです。
●また、トレーニングキャンプの部屋のことでは、上記２氏を困らせてしまいました。ごめんなさい。（最初の棟はシャワーやトイレが男女別だったのに、次に移る予定の棟は男女別じゃなかったのでクレームをつけたんです。結局、最初の棟の別階に移れて、めでたしめでたし、だったんですけど・・・）
以上、オフィシャルへの感謝を込めて・・・

長期海外遠征をして思うこと

鹿島田　浩二

「３ケ月北欧でＯＬしかできない環境に自分をほうりこめば、きっと速くなるだろう」
そういった甘い考えがあったのは確かである。遠征前は、日々のトレーニングに励む自分の姿よりも、遠征後一まわりも二まわりも成長して速くなった自分を想像していた。しかし、実際はそうは甘くなかった。トレーニングは沢山やった。毎日毎日ＯＬをやったし、その時の体力で出来うる最大限の量をこなしていた。でも、３ケ月といっても１日１日の積み重ねである。毎日毎日に進歩が見られないと、それがそのまま３ケ月続くように思えた。どんなに良い環境に身を置こうが、結局は自分次第である。
結局今になっても、自分が速くなったのかはわからない。確かにオーリンゲンやＷＭでは多少の成功（でもＷＭを成功とはいいたくない）はおさめたが、その実は、そのテラインに慣れただけであって、元から潜在的には持っていた力なのかもしれない。同じく長期遠征した他の２人も同じことを思っているだろう。
でも、今回の遠征でＯＬに新たな魅力を発見することができたし、ＷＭやオーリンゲンで海外にもライバルをつくることができた。これからのＯＬがより楽しく刺激的なものになったことは確かである。今回の遠征はそれだけで充分意味があったと思うし、もともと自分もそういうことを期待していた気がする。
新たな刺激を受けた今、日本に帰ってどう日常を過ごすか、それが、今回の遠征を生かすか否かの一番重要なポイントだろう。最後に、３ケ月（４ケ月？）もの間僕につきあってくれた国沢五月（一ッ橋大）、中村弘太郎（京都大）、どうもありがとう。

個人ショート・ディスタンス　（８月２１日）

チェコスロバキア国歌、２度流れる　～ショート観戦記～

丸山　哲史

初の「ショート・ディスタンス」世界選手権の日がやってきた。天気はくもり。レースの日程は、午前中に予選、午後から決勝（Ａ・Ｂ・Ｃファイナル）となっている。予選は

男女ともに５組あり、各国選手全員が走ることができる。そして、Ａファイナルに進めるのは各組上位10名の50名だけだ。それ以下だと20位まではＢファイナル、21位以下はＣファイナルを走ることになる。

日本チームにとって、Ａファイナルに進むのは非常にむずかしい事だ。というのも、各組にスカンジナビアや他のヨーロッパ強国の選手が必ずいるため、上位の７・８人がほぼ決ってしまっているようなものだからだ。あとはいかに中堅国に勝つかが問題となる。やはりベストを尽くして結果を待つ以外に方法はなさそうだ。ショート・ディスタンスのレースはトップが25～30分くらいと短いため、ひとつのミスが命取りになってしまうこともしばしばあり、非常にスリリングで見ている方にとっても大変面白い。

さて予選だが、日本選手のスタート時刻は中盤に固まっていて、まずまずのところだ。鹿島田は２分後スタートのソ連のエース、ウラジミール・アレクセーエフとほぼ同時にゴールに戻ってきたので、うまくいけばＡファイナルかと思っていたら、ウラジミールのタイムが悪くて残念ながらＢへ。（本人もだいぶミスをしたと言っている）　注目の村越だが、トップから６分遅れてゴール。結果が気になったが、惜しくも５秒差でＡファイナルへ進むことができなかった。他の選手は男女ともトップから10～15分差で決勝はＢを走ることになった。（山岸だけ決勝Ｃ）　福士は最終ポストをまちがえたため失格となり、午後は走れなくなってしまった。有力選手でＡに進めなかったのは、男子ではスウェーデンのホーカン・エリクソン、イギリスのステファン・パルマー、女子ではノルウェーのアンデルセン、イギリスのイベット・ホーグといったところで、やはりショートは何がおきるかわからないといった面白さが大変盛り込まれている。

そして、午後からそれぞれのファイナルが行われた。会場はなんと競馬場！である。ゴールレーンはメインスタンドの前に作られ、選手が馬のように走り抜けていく。特に地元チェコの選手が帰ってくると、まるでダービーのゴールのように歓声が上がり非常に盛り上がった。

決勝のスタート順は予選の下位から先にするので、遅いスタートの選手の方が基本的には順位が上になりがちである。しかし、ショートだけにどうなるか全くわからない。特に男子は、２番スタートのチェコの伏兵ピーター・コザックが勝ってしまった。ピーターはユニバシアードに出場したことはあるものの、ＷＭは初めてで、出場が決まったのも何と10日前のことであった。６位までには、スウェーデンのお年寄り（？）達３人とスイスのベテラン２人がはいった。注目のトーマス・プロケッシュ（チェコ）は13位、前回チャンピオンのペーター・トーレセン（ノルウェー）も12位といまひとつふるわなかった。

女子は何と６位までに３人もチェコ選手が入っている。優勝は20才のヤナ・シエスラロバ（チェコ）、２位もチェコの超ベテラン選手アダ・クカロバ、３・４位にスウェーデン勢が入り、５位にはやはり注目選手の一人であるハンガリーのカタリン・オラーがはいった。（なぜ注目かといえば、1972年のＷＭがチェコで開かれ、その時の優勝者がカタリンの指導をしたハンガリー人のサロルタ・モンスパルトだったからである。２日後のクラシックでこのカタリンが優勝してしまう）　６位にはまたチェコが入った。

ショートレースを見て思ったのは、大陸の選手がたくさん上位に入っていることだ。日本は大陸型のオリエンテーリングなので、きっといつかは・・・・。

個人ショートを走って

出田　裕子

８月11日、ＷＭに先だって開かれていたチェコ選手権に、私は日本女子として唯一参加した。チェコ選手権にはＷＭのようにロングとショートがあり、この日はショートだった。

ＷＭ参加選手も出場してはいたが、ほとんどはチェコの一般選手である。ちょっとがんばれば予選に通るんじゃないか、と思った。だが、全然甘かった。結果はダントツのビリでの予選落ちであった。この大会に出たおかげで、自分の実力（特にトップとの差）を知ることができた。これに出ていなければ、もっと漠然とした気持ちでＷＭに臨んでいただろう。

さて、８月21日、本番のＷＭショート。予選4.3km,up100m。私はＤ３というコースで、Ｄ２とＤ５の同時刻スタートにスウェーデンのアリヤ・ハヌス（前々回世界チャンピオン）とマリタ・スコグム（前回世界チャンピオン）がいるというすごい構成。スタートすると、意外とゆっくりなペースで集団が流れていく。５名縦一列の最後尾ながら、楽についていけた。道に出たところで、私は道を行き（他の４人は直進）、道→みぞ、とつなぎ、バッチリ１番へ。前半はこのように安全策で、後半は積極策に転じ、最後まで順調にいった。タイムは41分04秒で、20人中16位だった。トップは31分。予選通過ラインの10位は37分。予選通過まであと４分。縮めることは可能だろうか・・・。

午後からは決勝（Ｂファイナル）。5.0km,up125m。１ケ所アップの集中しているレッグがあるが、あとは下り中心の、快適に走れるコースだ。途中２分後スタートのお姉さん（オーストラリア）に抜かれるが、２分前のお姉さん（イタリア）に追いつき、その後も会ったり別れたりしながら、調子よく走る。ゴールレーンで２分前を抜き去る。37分51秒。え～、５kmで？　信じられないタイムだった。１キロあたり７分半なんて、新記録じゃないだろうか。トップは30分。私は43人中21位。半分より前だ。なかなか満足な結果だった。

今年からクラシックと名前を変えた個人戦が、長く苦しい孤独のレースなのに対し、ショートは、思いきり走れて、レースに参加できて（常に同じくらいのゼッケン番号のパックの中で争える）、スピーディーで、エキサイティングで、楽しい。上位にはいれる可能性も高い。観客受けもするようだし、これからのＷＭはショートが中心になっていくかもしれない。

ショート・タイプの恐さ

村越　真

「１０２番？！」。一瞬頭の中が真っ白になって、何がなんだかわからなくなった。しかもゴールレーンに並ぶ多くの観客の中での出来事だ。次の瞬間に、複数の最終コントロールがあることに気づいた。先のほうにもう一つのフラッグがみえる。しかし、私の行くべきコントロールは「７７番」、50ｍほど手前の藪の角にあったのだ。急いでそのコントロールに戻ったが、 102番に向かう時のような軽い足取りではなかった。推定ロスタイムは30秒。結果として、私は11位。10位であるノルウェーのロルフ・ベストレと５秒の差で、決勝Ａへの進出を逃した。

２日後に女子の個人戦で優勝するハンガリーのカタリンと競うスピード感に酔ったこと、77番といういかにも「最終コントロールは一つですよ」みたいな番号だったこと。不運といえば不運なのかもしれない。だが、不思議と悔しさはあまりなかった。午後には決勝Ｂが控えていたし、失敗をはんすうして、後悔を増幅させる習慣を、私は失っていたから。後悔すれば心はそれによって満たされるだろうけれど、現実を満たすことは決してない。

いくつかのアタックでのロスはあったが、それは避けられないものだっただろう。ペースは決して速くなかったが、予選を通過できるペースだという確信はあった。勝つべき相手に勝てば、予選は通過できる。去年のワールドカップでそれを痛感していたから、自信をもってそういうＯＬをしていた。その選択は決して間違ってはいない。ただ詰めを欠いていた。最終コントロールでのロスは、その象徴なのだ。それは今回の私のＷＭに向けて

の準備に対する、もっとも適切な評価のように思う。ショートという、ＯＬの競技性を極端に進化させた競技形式は、情け容赦なくそれを結果としてみせてくれたのだ。

最後まで詰めを忘れずに徹底してやること、常にそういうＯＬを心がけること、後悔の代わりに私はそれを考えていたい。

個人クラシック　（8月23日）

個人クラシックレース（女子）観戦記

木植　早生

今年からショートレースが行われるようになったため、クラシックレースへの出場者は、前年のワールドカップの成績等により１ケ国最大４名である。日本の出場枠は２名（宮川、出田）で、女子は合計23ケ国58名が出場した。

当日は天気良好、昼ごろにはかなり暑くなるだろうと予報があった。選手達はスタート時刻に会わせて起床し食事をとりバスに乗る。一面の小麦畑と針葉樹の林を見ながらの70分のバスの旅は長くも感じた。これからどんな展開になるのだろうか。不安、緊張、無心、闘志満々・・・様々な思いを込めたバスは、ただスタートに向かう。３列前の席に、今回の大会ポスターにも載っているチェコのエース格ヤナ・ガリコバ（前回２位）がいた。とてもおだやかな顔である。

今回の注目選手は、やはり地元のヤナ・ガリコバ、シエスラロバ（ショート優勝）、スウェーデンのアリヤ・ハヌス（前々回優勝）、マリタ・スコグム（前回優勝）、カタリナ・ボルグ、日本になじみのクリスチーナ・ブロンクビスト、ノルウェーはアンデルセンとブラットベリ、ハンガリーのカタリン・オラー、イギリスのイベッド・ホーグ（世界学生優勝）などである。

アップをするヤナ・ガリコバがそばを通ったとき自然にニコッてしてしまって、いけなかったかなと思ったら、首をかるくうなずかせてニコッとしてくれた。トップにいる人ほど厳しい気持ちを持ってはりつめているだろうに、微笑みをかえしてくれたヤナになんとなく親しみを感じた。

そんな中、７番目スタートの新沢さん（宮川の旧姓）は、アップ時のひきしまった顔を笑顔にかえて「行ってきます」とリラックスした様子で、数名が見送る中をプレスタートから本スタートへ消えて行った。その後、16番目スタートの出田さんも静かに山の中へ消えて行った。

２人を見送ったあと、バスでゴールに向かう。深い沢と山の波がいくつも右手に・・・これがゲレンデか、この山のうねりの中には、いったい何人のランナーが駆け巡っているのだろうか・・。そして途中、道路のすぐわきの急斜面に突如としてあらわれたポスト！

さらに少し行くと、給水ポストとその近くを走る男女のランナーが！　わくわく、どきどきしてしまう。

トップゴールは 105分。中間速報では出田さん53分、新沢さん60分位でまずまずのようだ。頑張って欲しい。

11:34 ヤナ・ガリコバのゴール。82分。

:46 ４０才を過ぎたオバサン選手シャロン（アメリカ）のゴール。133分。

:49 新沢さんの前６番スタートのアイルランドのゴール。

12:00 新沢さん 130分経過。アナウンスが聞こえた。「あと少し、ユー、頑張れ、走れ」皆駆け寄る、しゃがみこむ、いっきに水を飲む、「完走したよ」ユーほろりとする。

12:07 アリヤ・ハヌス、ゴール。87分。上位はむつかしい。
:17 出田さん。122分でゴール。
:20 ハンガリーのカタリン・オラー入る。80分を切ったか。速い。現在１位。
:27 カタリナ・ボルグ87分。85分でなければ入賞はむつかしいだろう。
13:00 ニュージーランドのキャティー入る。87分、ベストレースだ。すごい。
:03 クリスチーナのゴール。81分台。ヤナと同じくらい。
:15 ブラットベリ84分台。入賞はできそう。
:19 シエスラロバ。82分台。
:32 アンデルセン80分経過。
:38 マリタ・スコグム80分経過。決定！　オラー「79:52」で優勝だ。

日本女子２人は本当に頑張った。私は何人からか「ロング走りたかったでしょう」とか「どうして走らないの」と言われたが、どちらかといえばロングが好きな私が走ったとしても、完走できる気は今のところない。10km/420m ではへたばってしまったでしょう。全選手の中では確かに日本は下位ではある。が、ドーンとかけ離れているわけではなく、数分差で何人もいるし、それもいくつかの国が。世界の中の日本はまだまだ隅っこの目立たぬ存在だろうけれど、以前に比べて日本から見た世界は近くなったと思う。

時というのは、スタートへ向かうバスのようだ。いろいろな思いを込めて、ただ何もいわず黙々と走る。あと２年後、わずか２年後のアメリカＷＭの展開を期待しながら・・・。

個人Ｌｏｎｇレース

宮川　祐子

前回のＷＭで、私は好運にも個人戦決勝を走ることができた。しかし、レースはさんざん。後半、疲労から頭がもうろうとし大きなミスを繰り返した。リザルトは、私の下に香港のヴィッキーが一人いるだけだった。オリエンテーリングはスポーツなんだ、そのスポーツの世界選手権でまともな結果を残すためにはそれなりのトレーニングが必要なんだと、当たり前ではあるけれどとても重要なことを痛感した。

そしてＷＭ91。今回から，ショートとロングができると聞いたときから、私はロングを目指した。だってあまりにも前回の個人戦決勝が悔しかったから。そのため、この１年まじめにトレーニングに取り組んだ。特に４月からは、レースのその日までに1000km走ることを目標とし（最終的には、100km ほど及ばなかった）、さらにウェイトトレーニングや月に１、２回山道を20km前後走るトレーニングも取り入れた。その結果、自分でも体力が向上したことを充分実感できた。

そして本番。「充分な準備こそが自信を持った走りにつながる」と信じることができ、心はとても穏やかだった。スタート前、トイレで隣あった(?!)イタリアのエレナは「10kmは私には長すぎる」とこぼしていた。でも、私には10kmの長さは恐くない。エレナには勝てるかな、と４回目のＷＭにして初めて他国の選手と対等の位置にいる自分に気づいた。

プレスタートから本スタートへ進むと、まるで風呂敷のような大きいマップが置かれていた。さあ来い。スタートから３番まで良い感触でレースを始めることができた。いい調子だ。３番から４番へはロングレッグ。しかも、茶色が光輝くようなすごい斜面が間に横たわっている。いったんまっすぐに行こうとしたのに、ふと川沿いのルートが見えてしまった。おや、川沿いに行けば登りを減らすことができるぞ。これが悪魔のささやきだった。実際には、川沿いのルートはかなり距離がのびる上、川の縁の小径にはチクチク草が生い茂り（触れるとチクチクするのでこのように命名した）、岩を登り降りしなければならないものだった。しだいにミスルートであることに気づき、気持ちをレースに集中させるこ

とができなくなっていった。さらに、4番手前で追いつかれた11分後ろのドイツ選手にあっという間において行かれてしまった。こうなると、まるで2年前と同じ、世界の中ではミソッカスと思ってしまう私に戻ってしまった。集中が途切れてしまった私は、5番ポストを取った時ふと7番ポストを取った気になって、一気に斜面をかけ降りてしまった。結局それは大きなロスにはならずにすみ、自分がレースに集中していないことにようやく気づいた。そこからは、気持ちを切り替えることができたのだが、前半の上りによる疲労と暑さで頭がぼーっとしてくる。ぼーっとした頭で、淡々とレースをこなしていった。

今、ポスト付近での大きなミスをせず10km走り通せたことに対するほんの少しの満足感と、この2年間のトレーニングの成果がリザルトの私の下に香港とアイルランドを二人増やしただけなのかという失望感とが入り交じっている。あのミスルートを悔やんでしまう。でも、あのミスルートを取らなかったところでどれほどの違いがあったのだろう。あのミスルートを取ってしまったこと自体が、私の実力なのだ。10kmもの長いレース、きっと多くの選手が多かれ少なかれ、あの××がなければ・・・と何かしら思っていることだろう。今回のこの結果を、あのミスルートのせいにしてしまってはこれから先なんの進歩もない。

少なくとも今言えるのは、ロング種目で競技をしようと思うなら、なまはんかな気持ちで取り組んだトレーニングでは無理だということだ。トレーニングを積んだ者がいなければ、日本女子のロング参加は無し、でかまわない。でも、最後につけ加えると、それほどのトレーニングを積んででも、もう一度走ってみたいと思ってしまうほど魅力的なレースだったことも確かだ。

個人戦クラシック（男子）観戦記

中村　弘太郎

通常の個人戦であるクラシックは、ショートディスタンスの2日後に行われた。涼しかったトレーニングキャンプ中と異なり、太陽が高くなっていくにつれて暑い日になった。スタートが始まって2時間が過ぎても、一向に男子選手は姿を見せなかった。17.5kmの長丁場に加えて、この天候。所要時間が伸びるのは必至だった。中間速報からもそれはうかがえた。スタートの早い有力選手の中間タイムさえ、距離に対してあまりにかかりすぎていたが、それが選手のミスのためか、それともコースがタフなためかのいずれかはわかりかねた。有力選手の集まる後半の中間速報が入るにつれて、それが後者であることがわかっていくことになるのだが。

ところで、この中間速報だが、非常に手際が悪く、選手が通過してから10分も20分も経ってからようやく掲示されるというお粗末さで、観客の立場からすると残念だった。この点では、前回のWMで巨大な電光掲示板による「即報」を重視したスウェーデンは「見せる」という面でも先進国だということができるだろう。

男子選手がゴールしはじめると、いずれの選手も苦しそうに顔をゆがめてレーンを走っており、WMのクラシックーー特に今年のコースーーがいかに厳しいかを物語っていた。日本選手は、まず吉田が 166分でゴール。レース内容は必ずしも満足できるものではなかったようだが、「17kmの厳しいコースを走り切った」あるいは「2年間目指してきたことを成し遂げた」という充実感が感じられ、指をくわえて見ているだけの僕には、それがうらやましく思えた。

鹿島田は限界まで自分を追い込んだことがうかがえるような様子でゴールにとび込んできた。 143分。途中でキレて2度ほど座り込んだりもしたそうだが、途中スウェーデン選手と数レッグにわたって併走したというのだから素晴らしい。それでも彼は、やっぱり悔しそうにしているのだった。

一方、上位争いは、スタートの遅い有力選手の中間速報が入るにしたがって、徐々に絞られていった。観衆の最大関心事は、チェコの若手エース、トーマス・プロケッシュと常連の北欧選手の対決だったが、トーマスは第２中間で既に後退。第３中間で３分差の１位にたったスウェーデンの大ベテラン、ヨルゲン・モルテンソンが、その差を守って初優勝を遂げた。２位には、やはりスウェーデンのケント・オルソンが入り、彼はこれで「１・２・２位」と３回連続でのメダル獲得である。また、３・４位にソ連の選手が入ったことは注目に値するだろう。今回のクラシックで最も印象的だったことは、ニュージーランド選手の活躍と、ウラジミール・アレクセーエフ（４位）の上体のブレのない走りと、表彰式でのヨルゲンのとっても嬉しそうな顔だった。

17kmのコースなんて、よう走らんわ、と思っていたけれど、観戦しながら走れずに見ているだけの自分が無性に歯がゆく思えてきた。クラシックこそが「世界のNo.１」を決める試合。今度は走る側にまわりたい。

不満足の中の満足　～　やっと個人戦が走れて

吉田　勉

私にとって個人戦を走るということは、前々回のフランス以来の目的であった。フランスの時は５人目に拾ってもらったという意識が強く、世界選手権が初めてだったこともあって、個人戦を走りたいとは言えなかったし、スウェーデンのときは、直前に怪我をしたこともあって、積極的に出たいと言うことはできなかった。基本的に勝負に関して淡泊な事が最大の原因だろうが、自信のなさといったものもあった事は否めない。

２回も世界選手権に出たのにひとつも自分の記録が無い私は、今回はどうしても自分だけに対する評価を出したかった。そこで、前回が終わった時点で早々と個人戦に出ると宣言してしまった。世界選手権でショートディスタンスが始まることになったため、個人戦に予選はなく必ず決勝を走るということで、体力的な準備もかなり積極的に取り組んだ。走るレースを決めているのだから逃げる訳にも行かなかった。さて、ワールドカップを走って２度とも途中で切れてしまった経験から、今回の目標は精神的にも体力的にも最後まで切れずに走ることに置き、そのために「よどみなく遅いＯＬ」を実践しようと思った。もちろん、必要以上に遅いと言う意味ではなく、これが私にとって最良の結果をもたらすと信じていた。

調整もほぼ予定どうりにすすみ、当日の体調は万全であった。結果について言えば、コースが予想以上にハードなものであったため、どれだけ目標を達成したのか評価しづらいが、２－４番で10分程度のミスをした以外は、まあ思った通りに出来たと思う。残念な事と言えば、あまりに体力を最後までもたせることに意識をもっていったため、集中力を欠き、今春から練習してきたコントロール付近での手続きを実践することが出来ずに、ミスを犯したところがいくつかあるということである。３番のミスを考えるとやはり緊張していたのか（ミスそのものよりもリロケートに時間がかかったことについて）と思うが、他の部分では驚くほど落ち着いて出来た。７月に風邪のため20日間も運動できなかったことを考えれば、目標としたレースに近いものは出来たし、タイムは悪かったけれども自分がやってきた準備と収支トントンといったところだろう。

今回の１番の収穫は、ちゃんと準備をしてくると自分の限界も、可能性も、そしてこれからどうしていったら良いかも見えて来るものだということが、良くわかったということである。これからトレーニングを再開する気になればもう一度クラシックを走りたいという気持ちはあるけれども、そのときは「よどみなく速いＯＬ」をしないとつまらないだろう。それにしても鹿島田は速くなった。

個人戦レース記

鹿島田　浩二

スタートは10時54分、29番目。３分後にノルウェーのバルスタッド・ビョルナー、９分後にスウェーデンのニクラス・ローヴェグレン、12分後はフィンランドのピーター・イバースだ。イギリスの女子エース、イベット・ホーグと同時にスタートする。自分も彼らと同じ舞台にあがっているのだな、そう思った。

前半２～３番、初歩的なミスで＋３分。パンチ後振り返るがバルスタッドの姿はない。４番へはタフなロングレッグで、迷ったすえ直線的なコンタルートをとる。しかし、斜面のコンタ道にのった時、50ｍ程先を走るノルウェーのユニフォームを見る。ルートミス＋１分。４番でのアタックミスの間にノルウェーの姿は見えなくなる。４番の脱出で、迂回ルートをとった６分後のハンガリー人とすれ違う。５、６、７番と今ひとついいＯＬができない。７番の脱出後、後方の斜面を降りてくるニクラスとハンガリーが見える。ニクラスには中盤で追いつかれる予定だったのに、まだ３分の１しか終っていない。８から14番までは３人のパックで進む。スウェーデン・ランキング１位のニクラスであるが、それほど苦もなくついていけた。14番へのロングレッグでパックを離れ迂回ルートへ。結果的にこの迂回は遅かった。16～19番を一人でやるが順調に進む。しかし、20番へのロングレッグで突然疲労を覚える。21番から23番にかけてどんどんつらくなり、とうとう24番への途中では歩くこともできなくなる。しかし、24番手前で見た27分前と72分前スタートのランナーに勇気づけられ、25番へはなんとか走る。最終ポスト後、自分のゴールを伝えるアナウンスを聞きながらゴールする。

後半、極端にスピードが落ちたのは残念である。しかし、ニクラスにつるんで中盤速かったのはラッキーであった。まあ体力がなかったのも、ニクラスと一緒に走れたのも実力のうちかな。

これから、２年後、４年後、それ以降にもっともっと良い成績をあげるためには、やらなければならないことは山ほどある。挙げていたらきりがない。でも、その沢山のやらなければならないことのどれをやっても、今度はもう少しレベルアップするのではないか。そう思うと次回のＷＭが待ち遠しくてしようがない。

リ　レ　―　（８月２５日）

リレー観客としての長い長い一日

宮川　祐子

８月２５日、ＷＭ91最終日、リレーが行われた。バスの中では曇っていた空も、会場が近づくにつれきれいに晴れわたってきた。会場は牧草地につくられ、その牧草地の角の最終コントロールから約200ｍのゴールレーンが続いている。そのゴールレーンの周りにはすでにたくさんの観客が集まっており、日本からの学生を中心とした応援も見える。その観客席のお祭を待つようなウキウキした雰囲気とは対象的に、選手のために用意されたテントの周辺の空気はピンと張りつめている。リレーの選手からはずれてしまった私は、この張りつめた空気の中に入れない寂しさを感じながら、今日は観客に徹するぞ、とカメラを首に下げ会場を歩き回った。

日本女子の一走は、木植さんだ。９時の男子のスタートを見送った後、彼女はいつになく緊張している。無理もない。この時間、選手側の空気は痛いほどに張りつめているのに、それをとりまく観客側の空気といえばお祭り騒ぎも最高潮だ。その中で、スタートを待つ

一走の選手達が黙々とウォーミングアップを続けている。スタート10分前、コールがかかる。スタートラインの枠にぶら下げられた地図は結構高い位置にあり、背の低い選手達は手が届くのかと心配そうに手をのばしてみている。そして、9時30分一斉にスタート。木植さんは集団の一番後ろで、落ちついて地図を読みながら走っていく。うん、その落ちつきが戻ってくれば、彼女は大丈夫に違いない。男女ともスタートが終わり、観客達のお祭り騒ぎも小休止、スタートレーン周辺からぞろぞろと引き上げていく。

私も、選手関係者しか入れないゴールレーンのすぐわきの特等席にデンと腰をおろし応援体制に入った。男子の中間速報が続々入ってくる。地元チェコの健闘が伝えられるたび観客席は大騒ぎ、そして男子一走のトップ、フィンランドとチェコが競ってゴールするときはもう大変だ。このゴール騒ぎで、女子の中間速報がほとんど入ってこない。と思っているうちに、すでに女子の一走トップはゴール5分前の最終ラジコンまで来ている様子。誰がトップにゴールするのかとレーンをのぞいていたら、なんとフランス。そのすぐ後ろにニュージーランドのキャティー・フェッツがやってきた。前回までは、ただのかわいい中堅オリエンティアだった彼女のこの2年間での成長ぶりは目を見張るばかりである（個人戦でも10位）。そして、本命スウェーデンのアリヤ・ハヌスはトップから15秒差で二走にタッチ。地元期待のチェコ一走はスウェーデンから遅れること3分の6位。さて、トップが56分であったから、木植さんは75分くらいで戻ってくれば上出来なのかな、なんて思っていたら、最終ポストのところにフワフワ髪の木植さんらしき姿が、影絵のように映った。すごい！！　15位だ。スイスさえまだゴールしていない。興奮してタッチレーンを振り返ると、アリ（宮本）が待機している。この予想以上の順位でのタッチに、アリが変に興奮しなければいいのだけど、と思いながら見送る。木植さんはいつものにこやかな表情でゴール。気持ち良いレースをしたようで、「フィンランドの一走、バカなんだもん！」なんて発言まで飛び出す。

二走のトップゴールは、さすがスウェーデンのクリスティーナ・ブロンクビスト、そして4分離されてはいるもののチェコのヤナ・ガリコバが4人抜いて2位に上がってきた。しかし、そのすぐ後ろにはノルウェー、ハンガリーと続く。15位のブルガリアまでがゴールしたところで、二走のゴールがぱったりとなくなる。やはり、日本のお友達の国は、イタリア、アメリカ、アイルランドのようである。その中でまずイタリアが帰ってきた。アリはどうしたのだろうか・・・。三走トップの最終ラジコン通過が伝えられる。すると、アリが帰ってきた。相当疲れている。三走は、出田さん。出田さんのすぐ後を追うように、四走のトップ集団がスタートしていく。アリは、一番ポストで大きなミスをしてしまったらしいが、その後よくレースを立て直してくれた。後ろにはまだアメリカもアイルランドもいる。

三走のトップゴールは、スウェーデン。しかし19秒差までノルウェーのラグンヒルド・ブラットベリが追い上げてきた。4走に個人戦チャンピオンのカタリン・オラーを控えるハンガリーはトップから11分も遅れてしまった。さすがのカタリンもこの差は大きい。

さて、日本とそのお友達の3カ国の3走ゴールを待たずに、レースは優勝が決まりそうである。最終ラジコンからのトップのコールはやはりスウェーデンだ。ノルウェーのコールも入ってきたが追いつくことは無理だ。そして、スウェーデンの4人によるウィニングラン。長い長いトレーニングを経て、手に入れたこの一瞬。最高の笑顔である。その2分後にノルウェーがゴールした。3位は地元チェコ。3位でも観客は大騒ぎである。

日本の3走出田さんもかなり苦労したようすで戻ってきた。アイルランドは3走にエースを投入してかなり良いタイムを出し、一気に最下位からアメリカ・日本を抜いてしまった。しかし、まだアメリカは日本の後ろだ。のびのびと走っておいでよ、と胸の中でつぶやきながら、4走のヨッチャン（福士）を見送る。

そうこうしているうちに、男子もスイスの大逆転でレースは幕切れ。表彰式の準備が始まる。しかし、日本の4走ヨッチャンはまだか、まだか、と思っているうちに表彰式は別世界の出来事のように終わっていった。表彰式が終わると観客達はまだ走っている国があることなんて知らないかのように、散り散りになっていく。そうした中、日本のメンバー達は祈るようにゴールレーンを見つめる。帰ってきた。倒れ込むようにゴール。悔しいレースだったのだろう。しゃくりあげている。でも、その後アメリカが無事完走して失格せずにゴールしてくれた。これで初めて日本女子は、最下位から脱出できたのだ。

こうして、観客としての長い長い緊張の一日が終わった。

リレーに参加して　～　1走の思い

木植　早生

国内ではリレーにずいぶん参加したが、1走というのは1・2回だったろう。スコアOLのスタートでブザーの音と共に花火のようにパァーと一斉に散って行くのが何とも楽しくて非常に好きなのだが、同じ一斉スタートでもリレーの1走はなぜ嫌いなのか。それは、ランニング・オブザベーションの練習が嫌いなのと一緒で、同じ時に同じ方向へ同じスピードで走るのがイヤなのだ。気が散るとか集中できないとかではなく、追従行為の不正義感もあるし・・・それ以上に、私のモットーは「OLは皆で楽しむもの、でも一人でやるもの」だから。WMみたいに世界のトップランナーに混じれば、私が走ったところで100mも行けば一人になってしまうんだからいつもと変わらぬ、と考えればとは分かっていたけど・・・。ショート・レースの異コース5人同時スタートに、なんだか焦りと勢いに飲み込まれた気配があったものだから、1走は心配でした。さらに、1走の私がペナルティーをしてしまったら、あとの3人はまったく走れなくなってしまうわけです。こんな事はあってはいけないのだが、もしペナったしても、4走なら3人走ったあとだから少しは無念さがましかな、などと何日か前に私が1走をやる案があるんだと言われてから、かなりのとまどいと不安を持っていた。それでも、日本チームの「完走プラス最下位脱出」の目標のために、私も頑張りたいと皆と同じ思いを持っていたので、「スタートは声援の中を行くし、時間制限にかかることなく走れるし、タッチもできるし、走った後は応援やカメラ片手の観戦もできるな」［一昨年のリレーは彼女が4走だったが、3走の時点で時間制限による失格のため、タッチを受けることなくゼッケンをはずして寂しく走った：編集者註］と、なんとかいい方に気をまぎらわしていました。レースのミスのいくつかはいつもあることだし、私の力では言い訳みたいに「あそこで・・あの時・・」と言ってもしようがないし、他の選手だって同じなのだから、やはり私の位置はそこにしかないのですよね。せめて良かった事だけでも書き残して、特に若いオリエンティアの何かの材料になればと思います。そして、この報告は、WM日本チームに対して言葉や手紙や援助金などいろいろな形で応援くださった方へのお礼でもありますから。

さて、レース当日、私のマイペース型を特に知っている倫也コーチから「速い国はその国どうしで勝負しているのだから、すぐに離れてしまっても、それはかえってラッキーと思ってるヨ。自分ひとりで周りにまどわされる事なく、いつものようにやってくればいいのサ」と、頼りになる元気づけをしてくれました。もちろん、チームメイトも私のペースに合わせて応援してくれたし、「写真を撮りまくるよ」なんて嬉しい事も言ってくれるし・・。そんな中、1走のゼッケンを胸につけるのが妙にてれくさく感じながらスタート枠に入った。「右も左もかなり速そう」「あの選手なんてあんなに足が長いんじゃ速いはずだよなあ」「うわぁ、となりのノルウェー選手が精神統一してるよ」「なによ、お友達っていってたアメリカやアイルランドだって、ものすごく速そうじゃない」「この中で私が

一番遅そう」「まな板の鯉じゃない」「逃げ出せないよ、ここじゃ」「やだ、やだ、やだよぉ～」　こんな気持ちを笑顔に変えて前を向けば、レーンのわきはすごい人だかり。背の低いのをあざ笑うかのように頭上の地図に背伸びをしても手が届かず、役員に「ジャンプしてとるしかないネ」とうけられちゃうし・・。このあたりの雰囲気で、だんだん私得意のお祭り気分になってきた。

スタートの合図で地図をもぎとり（ジャンプしたので、この表現が適している）、地図の北を確認、コンパスをセットし、そしてルートチョイス。わずか数十秒のうち視野に入ったのは、一流選手達がスルスルと流れるように森にとびこんでいった後姿。その後はなぜか「どうせ皆は速いんだ、のんびりのんびり」と開き直った。１番へ。深い沢の向こうにあるコントロール。斜面を下る。その時、正面のカベに（コントロールより50m位手前）10数人がベッタリはりついてアタックしているではないか。思いもよらぬ光景に「いくらなんでも１番で10分も離されるはずはないものね」と自分なりに進む。ところが、ピタリとアタックしパンチするうちに皆に追いついてしまった。さすがにスウェーデン・ノルウェーはいなかったが、多分ほとんどの国が先頭に引き連れられズルズル来たと思われる。後で全ポ地図を見ると、１番は約200m幅の中に４個あった。それにもかかわらず、途中で集団から離れていった国は私の目に入らなかった。おそらく、スウェーデン、ノルウェー、日本とあと１～２国以外は皆引きずられたのだ。

２番へ向かう途中、私は他人ごとのように「１走っておもしろいな。一流選手でもリレーとなると思いがけないミスもあるんだもん」と、おかしくなってしまった。２番へ。うまくチェック。このあと、オーストラリア、デンマーク、ドイツ、イギリス、ポーランドに抜かれる。３番へコンタリング。「えっ！！　フィンランドが、ここはどこ？　って立ち止まっている」　４番へ。ヤブの中。うまくクリア。こんな私の走力なのに、まだ抜いていく国がある。ポーランド、イギリス、スイス、デンマーク、なんとハンガリー。そうして、ロングレッグ、ショートレッグ、コンタリング、道走り etc.　なんと11番であのフィンランドに抜かれるまで、フランス、イタリア、ブルガリアとも会っている。だから、私はものすごく遅れているわけではないんだな、っていう位置がわかった。世界のランナーとひょろひょろ出会うだなんて皆どうしちゃったのだろうか。

思い残すのは12番からのゆるい登り、わずかなのに走れない、とうとう歩いてしまう。皆に悪いなと思いつつも、もう足が上がらないのだ。あと２つのポストのみというのに動かない。11～12番で５人に抜かれた。このあとゴールまでに８分の差をつけられたことになる。走力さえあれば・・。くやしいとか、残念とか、情けないというのではなく、「あーあ、もったいなかったなぁ、もう少し走り込んでおけばなぁ」という気持ちだった。

最終ポスト。そしてゴールレーン。遠くにアリ（２走）が見えた。日本からの応援者が「ラストだ、頑張れ！」とひときわ大きな声で叫んでくれる。他の観客も拍手してくれる、手を振る。コーチをはじめ何人かが「お疲れさん」とゴールした私に笑ってくれた。いろいろな人、皆ありがとう。私は、共に過ごした２週間と、このさわやかな想いを、また２年後に味わいたいな、つくりたいな、となるかどうかわからない。でも、２年後は、個人でもリレーでも走力・体力をあと少し（ほんとはもっともっと）つけただけで、なかなかいい線へ乗るような気がしてならない。

リレーの禁句・・・「ゴメンネ」

宮本　知江子

「走りやすいよ」「ゆっくりで大丈夫」　タッチの瞬間、１走の木植さんやまわりの日本人から声援がとんだ。トップから約15分遅れで、彼女は予想より早く帰ってきた。「貯

金ができたな」そう思って気持ちにあせりはなかった。日本でふつうにＯＬをやるような気分で走りだし、マップをにぎった。コースは７kmあまり。12時まで78分あるから、12時前のゴールを目標として１番へ向かった。・・・アタック！ない！　それまで平常心だったはずなのに、実は非常に特殊な緊張状態であったことがここで判明した。１回アタックをはずしただけでこんなにオロオロするとは。結局４回目のアタックで１番を見つけたのはスタートしてから15分後、貯金はもちろん使い果たしていた。急斜面の登り降りでパンパンになった足をひきずり、半ベソをかいて次へ次へと向かった。精神的には半錯乱状態だったから、小さなルートミスを繰り返す。その間、予想どおり他の国のランナーには全く会うことなく、完全に独りで山を走った。これまでに比べてポスト位置が難しい。何回か「誰か私を追い越してアタックしてくれないかなあ」と弱気なことを考えた。ロスタイムは少ないものの、１番以外にも１回のアタックでチェックできなかったコントロールがいくつもあった。左腕の時計にセットされていた12時の時報が鳴ったのは、まだ12番（最終は14番）に向かう途中だった。それから50ｍの一発登りが控えていた。この後に大きなミスはなかったわけだが、この間、私の帰りを待っている仲間の表情が浮かび、正直言って帰りたくなかった。

１番コントロールで突然パニック状態に引き込まれてしまう。これがＷＯＣリレーの魔力だろうか。

リレーを走って

福士　淑子

自分の不注意でショートの決勝を走れなくなった［最終コントロールの確認ミスで失格：編集者註］私にとって、リレーがＷＭでの唯一のレースとなりました。事前に、クラシックに出ない選手はリレーを走れると思っていましたので、走らせてもらえるレースがあるという喜びだけで４日間を過ごしました。

当日、４走だった私は、なるべく日に当たるのを避けて、たまに聞こえてくる大きな声のアナウンスと日本選手のレースの様子に耳を傾けながら、テントサイトでごろごろしていましたが、１走早生さんの GOOD RUN と走り終えた後のレースを楽しまれた笑顔に気持ちが盛り上がり、３走の出田さんのゴールに合わせてテーピング、ストレッチ、アップをする頃には、普段のレース時のように心地よい緊張感と身体が走りたがっている感覚で満たされていました。

男子優勝のスイスと２位のノルウェーの４走ゴール直後で、報道陣のごった返すレーンの中でタッチを受けてのスタート。前半はまだ積極的に走っている自分がありました。１番から私にとって嫌気のさすコントロールだったけれど不安な気持ちはなかったし、３番コントロールでは会うはずのないアイルランドの選手に追いついてしまったぐらいでした。しかし、今レースを振り返ると、とても高いテンションで、頭と体のバランスが崩れる極限のような状態で走っていたようでした。中盤で、コントロール付近に来ているのにどうしても取れず、かなりの時間をロスした時点で精神的に疲れ果て、既に自分のレースは終っていました。ペースを崩した後はひどいもので、レースをしているのか、ポスト探しをしているのか、といった朦朧とした状態。とにかく完走しなければという気力だけでのゴールでした。

結果としては、当初の目標であった制限時間内の完走と、最下位からの脱出を達成できたわけですが、中堅国との力の差を強く感じさせられました。今回は、制限時間の延長のおかげで、タイムへの妙なこだわりもなくのびのび走れたことは確かですが、思うようなレースができず、それは初めてのＷＭの雰囲気にのまれた部分も多少あったにせよ、未熟

なレース内容に悔いが残りました。と同時に、自分に欠けているもの（技術面でも走力面でも）をいやというほど知らされました。今の自分を乗り越えることで、少しでも世界に近づけることを信じ、世界の舞台で走って味わった感覚とこの悔しさを鈍らせる事なく、次のステップにつなげていきたいと思っています。

変わりつある流れの中で　～　男子リレー観戦記

吉田　勉

世界選手権が始まり、時がたつにつれて実はとてもワクワクしていた。その理由は、鹿島田の予想以上の速さである。これまでの日本チームには１本しかなかった柱が２本になる。それはリレーでの新しい展開を予測させた。そしてこの興奮は自分がリレーを走れないことがわかった後でも決して衰えることはなかった。

さて当日。鹿島田にとっても、中村にとっても初めての世界選手権のリレーである。いくらインカレで緊張感のあるリレーを経験しているといっても、学生の中では彼らは絶対的なエースである。多少失敗したところで他の選手などには負けないという余裕を持って走ることができる。しかし、世界選手権は、いいレースをしてやっと闘えるタイムをだせるレースであり、その緊張感は比ぶべきもない。

村越も、前回よりもはるかにプレッシャーを感じている。今回ほどチームの成績が気になる事はなかったはずだ。そして、既に８回の選手権を経験している山岸までもが、自分をコントロールするのに必死であり、見ているこちらも背中が寒くなるほどであった。

午前９時。男子の１走がスタートした。村越はいつもの最後尾ではなく、集団の中に混じってスタートしていった。前日のテクニカル・ミーティングで１レッグの予想タイムが70分という事なので、村越，鹿島田が80分前後、中村，山岸が85－90分で走ることは可能だろう。そうするとトップから１時間以内で走る事ができる。

チェコスロバキアとフィンランドが、70分を切ってゴールしてきた。ニュージーランドのアリスタ・ランデルズが71分７位で２走につないだ。個人戦の30位といい、彼もすっかり速くなった。村越のゴールは、出遅れた12位スウェーデンのパックの後に続いての15位。所要タイムは79分。いつもながら素晴らしい。２走の鹿島田はデンマークの選手をうまく利用し、順位を１つ上げて（村越が１走を走ってその後に順位を上げた選手がかつていただろうか）デンマークに続いて83分14位でゴールしてきた。後ろには、かつて競り合いさえ出来なかったブルガリア，フランス，ポーランド，オーストラリア，ルーマニアがいる。アメリカ以下の国は遙か後方だ。この異常なプレッシャーの中を中村が駆け抜けていく。初めてのリレーにして、ショートで思うような結果の出せなかった彼にとっては、うれしいがその何倍も苦しいスタートであったに違いない。正直なところ私自身、選手として走りたいという気持ちもあれば、選手でなくて良かったという気持ちが半ばしていた。しかし、そんな気持ちを私以上に持っていたのは、４走の山岸だったかもしれない。

３走の中村は順位を３つ落し、17位でゴールした。タイムも94分であったが、オーストラリアがブレーキを起こし、ルーマニアもタイムが伸びず、18位のルーマニアには２分強、オーストラリアには９分差で山岸につないだ。中村は走り終わった後落胆していたが、70分という設定タイムと様々な状況を考えれば、よくやったと言いたい。

表彰式の準備が始まる中、中堅国が続々とゴールしてきた。ドイツの失格もあって、山岸のゴール予定タイムになっても、まだ14位までしかゴールしていなかった。フランスが大ブレーキを起こしたらしい。私は（多分会場にいた日本人みんなが）「１５」と言う数字を現実のものとして感じていた。ルーマニアチームが同じように４走のゴールを待っている。チームオフィシャルだろうか、「15th, Romania ?　France ?　Japan ?」と片言の

英語で話しかけて来る。彼らも初めての世界選手権の参加での好成績に期待している。そういえば、モデルイベントで彼らのうちの1人と話したとき、1カ月働いて70マルクしか稼げないということを言っていた。激しい自由化の流れの中で彼らの出場にはかなりの無理があったに違いない。

しばらくして、フランス，ルーマニアが続いて最終コントロールをチェックした。ルーマニアチームは、最後の力をふりしぼって前のフランスを追い込む自国の選手を追って走っていった。3分ほどして、オーストラリアの4走がゴールしてきた。私たちの前を走り抜けて行くときに、ちょっとこちらを見てウインクした。そして、その後2分して山岸が18位でゴールした。

それでは、上位の事について少し触れておこう。1走でのスウェーデンの大ブレーキが、混戦の幕開けだった。1・2走でチェコスロバキアとフィンランド，ソ連，そして個人戦では全く期待はずれだったノルウエーが良い位置につける。チェコスロバキアはトーマス・プロケッシュ，フィンランドはレイヨ・マッティネン，ソ連はシクステン・シルド，ノルウエーは前回チャンピオンのペター・トーレセンといったエースを1走に起用したことが当たったようだ。3走でスイスのウルス・フリューマンとスウェーデンのヨルゲン・マルテンソンが驚異的なタイムをたたき出し順位を上げる一方、チェコがブレーキを起こし脱落。3走終了時点では、ノルウエーが2位以下に1分半の差でトップ。その後は4カ国が秒差で続くという展開で、どこが勝ってもおかしくないという状況であった。4走中間で一時スウェーデンのホーカン・エリクソンがトップに立ち、女子とのアベック優勝かと思われたが、彼はソ連のウラジミール・アレクセーエフとともに脱落し、その間隙をぬってクリスチャン・アーバーゾルドがスイス悲願の初優勝のゴールへ飛び込んだ。そして、4区間を危なげなく走ったノルウエー，フィンランドが相次いでゴールした。フィンランドは、エース格のピーター・イバースを怪我で欠いた中で全員がタイムを揃えて掴んだ立派な3位であった。その他では11位に入ったニュージーランドの健闘が光った。

さて、話を日本チームに戻そう。私たちはこの結果をどうとらえればよいのだろうか。「現実は厳しかった。」と言ってしまえばそれまでだ。「夢を見てたんだ」と言われればそうかもしれない。でも、やはり私はこう言いたい「やっと夢を見られる位置まで来たんだ」と。前回あんなに遠かった中堅国の背中が目の前に見えてきた。日本人の走りやすいテラインだったということを差し引いても、私たちは確実に次のステップを踏んでいる。ゴールでオーストラリア選手が私たちに送ったウインクは、次回の相手として私たちを確実に意識し始めたしるしだったとするのは考えすぎだろうか。

橋ヘッドコーチは4走が出た時点でテントに戻って祝杯を上げていた。考えてみればあのとき、既に今回の目標は達成されていたのかもしれない。結末は少しほろ苦いものであったとしても。

はじめての世界選手権リレー

中村　弘太郎

会場に到着した時には、男子のスタートから1時間近くが経っていた。放送は、村越さんがスウェーデンのすぐうしろを走っていることを伝える。荷物を置き、チェンジオーバーの様子を見に行くと、ちょうど1走のトップが最終ラジオコントロールを通過したところで、観衆の盛り上がり方がすごい。WMのリレーを走るんだ、という実感が湧いてくる。一方で、緊張で顔がひきつっているのが自分でもよくわかる。1走のトップで69分。例年より10分近く長い。「目標75分」だったが、85分は覚悟しなければ。リレーというより、ほとんど普通の個人戦を走るようなものだ。

村越さんが帰ってきた。10分差の79分。タッチを受けて鹿島田が出ていく。同じように、彼が帰ってきたら今度は僕が出ていくことになるのだ。村越さんや鹿島田や倫也さんと同じチームで走れるなんて、素晴らしいことじゃないか！　ＷＭなのだ。１年前には想像さえできなかったことだ。

鹿島田は83分で戻ってきた。しかもデンマークと一緒だ。橘さんが一言「大事にいこう」そう、ショートの時のような馬鹿なミスはしていられない。前の２人がこんないいレースをしているのだ。

デンマークがすごいスピードで視界から去ってしまった後の２番で、３分ほどのミス。まだそれほどのロスになってはいない。先はまだ長いから以後ミスをしなければ大丈夫だ、と分かっていながらも「ショートの失敗」が頭をかすめる。自分の判断に自信が持てずに、コントロールの手前で立ち止まってしまったり、弱気なルートをとってしまったりする。正しいと分かっていても、もう一度念を押さないと足を前に踏み出せない。怖いのだ。

コース後半は登りとショートレッグが続く。少しでも気を抜いてはいけない。これ以上のロスは許されないのだ。17番への登りで、頭の中が真っ白になりかける。我慢、我慢。次第に会場のざわめきが大きくなり、ようやく最終コントロールが見えた時には、ただただ「ああ、助かった。やっと戻ってこれた」という気分だった。

94分。せめて88分で走りたかった。不可能な数字では決してない。しかし、力が足りなかったのだ。自分の潜在能力を引き出すことができないのも実力のうちである。これから２年の間に、村越さんや鹿島田のように力を限界まで出せる選手になろうと思う。

男子リレー報告

山岸　倫也

ついに、夢を実現する日がきた。今回のような強力なメンバーで、リレーに臨める日を何年間待ったことか。長いこと選手をやってきた甲斐があるというものだ。１走は村越、世界中の誰もが認める日本のエースだ。彼のＯＬは今や円熟期を迎えている。２走は鹿島田、早くから注目された天才が、初めての世界選手権に挑戦する。３走は中村、昨年から急成長し、今や鹿島田の最大のライバルに。そして４走は山岸、８回目の世界選手権を走る。確実な試合運びは老練だ。このメンバーで、今回は最弱のグループからの脱出をはかり、15位以内をねらおうというのが目標である。

午前９時、男子のスタートである。ウィニングタイムは１人70分。我々にとっては80から85分で走るのが目標だ。村越は、「10回やっても10回このタイムが出せる」という確実な走りで、14位で帰ってきた。79分。やはりすごい。トップとは10分差だ。２走の鹿島田も83分でつなぐ。驚いたことに、順位が初めて１つ上がった。この段階で13位を走るなんて、79年のフィンランドの大会以来だ。

夢が現実になりつつある。身震いするほど、わくわくし、また不安になる。リレーで控え選手にまわった吉田が、「今日は、走りたいけど走りたくない」と洩らしたが、選手としての本音だろう。しかし、ここからが本当の戦いだ。少しでもミスをしたり、戦意を失ったチームが脱落していく。しかし、２年前までのライバルたちは、はるか後方を走っている。いまや、直接競い合わなければならないのは、ルーマニア、オーストラリア、イタリアといったうまく行けば10位すら狙えるチームなのだ。緊張が張りつめる中で、中村が16位で帰ってくる。94分。かなり疲れている。すぐ後ろにルーマニア。その後ろにはオーストラリアが迫っている。

走り出すと、１番コントロールの手前ですぐに急な登りとなる。この登りが今大会の最大の障害だ。登りを制した者が、生き残れるのである。１番を通過してスピードが鈍って

いるところへ、ルーマニアが追いついてきた。速い。3番ではもう見えない。6番の手前の急な登りが再びペースを乱す。9番の出入りでついにオーストラリアが姿を見せる。ここはあきらめた方が負けだ。登りがつらい。登り切ってからのスピードが出ない。何度かあきらめそうになるが、相手だってつらいはずだ。だが、最後の登りでおいていかれる。残り1キロ、17番でついに見えなくなった。92分。18位。自分が準備してきたことの結果だ。満足しよう。

結果論でいえば、すぐ上にいたルーマニアとイタリアが落ちてきていて、あと5分早ければ、3つ順位が上がって15位になれたことになる。それを知っていれば……、と言うのは簡単だ。でも、「知っていたら5分早く走れたのかい？」、「知らなかったら走れなかったのかい？」と自問しよう。そんなことはないはずだ。

順位はそれほど上がらなかったけれども、我々は1つ上のグループの仲間入りをすることができた。もう、後ろを気にする必要はない。それより、結果はともあれ、ゲームに参加し、4走まで戦い抜いたという成果に満足したい。さあ、次は北米だ。

総括

女子コーチとして

山岸　倫也

「戦える可能性が見えた」。それが今回の世界選手権大会を終えた印象である。今まで参加こそしてきたが、確実に最下位になるだけの準備しかしてこなかったし（そして実際その通りになった）、どうすればそれ以上の結果が出せるのか、手がかりを見つけるのも困難であった。コーチの仕事は、世界選手権は恐くないんだよと選手に言い聞かせ、選手権が終了したら、いかに選手にうまくいった部分を認識させるかであった。うまくいった部分と失敗した部分、レースを振り返れば両方が存在するのだが、差し引きがあまりにもマイナスとなっていたために、プラスの部分を見つけ、そこから次回への道しるべを探し出すのは困難だったのだ。

しかし、今回は違う。たとえ差し引きがマイナスであろうとも（それは各選手が個人的に決めること）、各選手が、失敗と成功の両体験を自分から認識し、どうすれば、1つ上の結果が出せるのかを具体的に感じられたはずだ。それだけ、選手のレベルが上がったということだが、言い替えれば、世界選手権への目標を具体的に持ったこととトレーニング量の格段に増えたことで、今まで気づけなかった出来事に気づき、見えなかったものが見えてきたということだろう。

確かに我々は、優勝しようとか入賞しようとかいったレベルからは、相変わらずほど遠いところにいる。しかし、次元は低いかもしれないけれど、「競い合う」ことができるようになった。アメリカ、アイルランド、イタリアの3チームは十分に競い合える仲間だし、フルメンバーを送ってこないベルギー、カナダ、ホンコン、スペイン、ポルトガルなどは総合的な実力は我々以下かもしれない。「競い合う」ことができ、その楽しさを味わった者は、競技者として第1歩を踏み出したことにもなろう。本当の勝負はこれからである。我々はようやくどうすれば良いのかわかったところだ。

男子コーチは何をしていたのか？

村越　真

男子コーチとしての総括の原稿を依頼された。帰りの飛行機で散々考えたが、書けなかった。どう書いたらよいのか皆目検討もつかなかった。仕方がないので、形式的に書いてみよう。

●結果

ショートの予選で11位、14位、18位、19位、そして21位。クラシカルで50位と60位。またリレーが18位。数字だけ見れば可もなく不可もなく。

●成功の原因

第一にナショナルチームも結成６年目を迎え、コーチやメンバーともに活動の要領が分かってきたこと、走り込みなどの企画により、普段の練習が充実してきたこと、若手が伸びてきたり、カッシー・クーニー・弘太郎のように長期遠征をする者の出現で、チームが活性化したこと、などが挙げられるだろう。

●成果

リレーの２走でカッシーが史上はじめて順位を上げたことは大きく評価できる。リレーとは「受け継いで」走るものなのだから、これはリレーにおける初めての成功として特筆したい。３、４走についても、ここ数回なかった競り合いをし、次への課題を明確にしてくれた。それはショートやクラシックの結果についても言える。

●課題

ショートは、我々にとって、最も具体的な目標を設定しやすい競技形式であることが確認された。予選通過という結果を出すためには、確実で詰めのしっかりしたＯＬをしながら、走力に裏打ちされたスピードアップが必要である。また、クラシックで満足のゆく結果を出すためには、長い距離をソツなく走ればいいのではなく、時には途中でリタイアするくらいのレースのペースを獲得することが必要であろう。またリレーには、登りでもついてゆくことのできる走力と、常に前にでる挑戦的なレース態度を持つことが必要だ。

●ビジョン

私は今回のＷＭに臨むにあたって、リレーでは５時間、15位というビジョンを掲げた。トップタイムの伸びを考えればこのビジョンはほぼ達成されたし、15位との間にこれまで横たわっていた大きなギャップは、今では、「ひょいと飛び越せるかもしれない」くらいになった。なにより、最後まで15位の可能性のある位置で、ワクワクさせてくれるようなレースができたことは大きい。ビジョンとは「どこか遠くにある理想」でしかなかったのだが、これからは胸をときめかせてくれる現実の可能性となったのだ。

●さて、私は何をしたのだっけ？

この質問に答えるのは難しい。何もしなかったと言い切ってもいいくらいだが、そうする度量は私にはない。だが、一番肝心なのは、この点、つまり私は、あるいはチーム全体は、ひいていえば日本のＯＬはこの結果のために何をしたのだろうかという点である。その答えが見つからないのだ。もし今回得た成功が、個々の努力によるものだったら、それはそれでいい。しかし、チーム、あるいは日本のＯＬ界は、この成功を継承してゆかなければならない。それに失敗している例を今回腐るほど見せられてきた（たとえば、８１年のＷＭで６位に入賞しており前回９位のオーストラリアは、今回見る影もない。８７年ごろは頑張っていたフランス男子や、統一で強化されたはずのドイツもそうだ。北欧の一角デンマーク男子も、２走までは日本のすぐ上にいる）。成功を継承するためには、個々の努力を超えた何かをみつけ、形として残してゆかなければならない。それは実はエリートの競技力向上だけでなく、普及や組織の充実についても言えるのではないだろうか。多くの方に考えて頂きたい問題である。

ヘッドコーチとして

橘　直隆

私がチームに関与してから３度目の世界選手権である。最初のフランスでは、個人で予選通過者なし、男子リレー最下位、女子リレー失格と、失意の中で大会を終えた。それも、選手が自分の力を出したものとはいえなかったので、余計に悔しかった。これを教訓に、前回のスウェーデンでは日頃の自分の力をいかに発揮するかをテーマにしてのぞみ、女子リレーは最下位だったものの、男子リレーは５チームに勝って19位、個人も村越が予選を通過した。目標は一応達成できたが、それ以上の成績を得るためには「より以上の走力」が必要と考え、報告書では今後の課題として走力を中心にとりあげた。その後、ナショナル・チームの機関誌「ブリテン」には走ることに関する記事が多く掲載された。（これは、編集担当の菅原氏の趣味と一致していた）　これにより、世界選手権を目指すメンバー（特に女子）の日頃の練習量は以前に比べ相当増加した。これに加え、鹿島田、中村、福士を中心にした若手の追い上げが激しく、今回のセレクションは非常に盛り上がりを見せた。10人の選手が選ばれた段階で、「今年はやりそうだ」という外部の声をいくつも耳にしたし、私自身もそのように感じていた。なぜそう感じていたのか、明確に答えることはできなかったが、強いて言えば、チーム全体に土台のような確固たるものができてきたことだろうか。言いかえれば、「世界選手権に出たい」と常日頃から考え、それを練習に結びつけた者しか残れない層の厚さが実現しつつあるということであろう。

今回も前回と同じように、チームとしての具体的な目標（順位）は設定公表されていない。しかし、最も重要視しているリレーでは、女子は「最下位脱出」、男子は「前回以上もしくは中堅国と勝負すること」が、共通認識としてチーム全体に浸透していたことは事実である。男子選手の報告の中で15位という数字がたびたび使われるが、15位は近い将来の目標であって、大会前までは夢に近い数字だった。

さて、最初の種目「ショート・ディスタンス」では誰も決勝Ａに残れなかった。決勝Ａの定員は、前回の個人と同じ５０名だが、前回は予選に一国４名出場であったのに、今回は一国５名出場できるため、中堅国以下は苦しくなるとの私の予想通りであった。その中で、惜しくも５秒差で決勝Ａに残れなかった村越の健闘は特筆すべきであろう。それよりも、各国５名が一人ずつ５コースにわかれる予選の方法は、１コースについていえば国別対抗戦となり、リレーの成績を予測するのに都合がよかった。男女とも各選手の順位を平均すると１７位程度になり、当初の暗黙の目標を達成できる可能性は大きいと考えていた。

「リレー」では、女子はアメリカに勝って「最下位脱出」、男子は順位をひとつ上げて「前回以上」に加えて「中堅国との競り合い」まで経験することができた。それ以上に、４走まで順位が確定しない激しい争いの中で戦えたことや、相手にミスがあったにしても前半途中でデンマーク・フィンランドなどの有力チームの背中が見えたことは、今後の日本チームに大きな影響を及ぼすだろう。順位的には一つ上げたにすぎないが、内容的には大きな変化があった。男子リレーに関していえば、前回の日本チームの合計タイムは優勝チームの133%であったが、今回は125%まで縮めている。女子も160%から150%近くまで縮めた。このように、今回の日本チームは確実な一歩を進めることができたと考えている。

この進歩は、前に述べたように、練習量の増加と国内の競り合いによるものであることはまちがいないが、それとともに、選手のもつ外国の地図とテラインに対する不安と恐れが非常に減少していることも、その理由のひとつであろう。たしかに、今回は地形的に日本と似ている所だったが、かつてならそれでも外国のテラインというだけで精神的に負けてしまうこともあった。（フランス大会ではそうであった）　この改善は、国内の合宿等で、持続的に各選手の個性に合わせた地についた技術を指導してきた男女コーチと、かつては数少なかった選手個々の個別コーチの努力によるものであろう。ＯＬの歴史の浅い日

本では、最前線を引いたトップエリートＯＢがまだ数少ない。その数少ないＯＢが、日常のトレーニングや合宿で選手達のために力を発揮してくれたことにも感謝したい。

では、日本チームがさらなる前進をするために、何を課題にすべきであろうか。選手が心がける練習目標のひとつは、ランニング・スピードの向上であろう。ショートが大会種目として定着の傾向を示し、リレーで競り合いの中に加わるとすれば、今以上のスピードが要求されてくる。全体的な練習量が不足しているため、この２年間は量に焦点を合わせていたが、今後は、練習の質に関しても配慮することが必要になるであろう。もう少し具体的には、ロングジョグ中心のトレーニングだけでなく、強い負荷の追込みトレーニングの計画的挿入を考えていかなくてはならない。この練習は、日本選手の弱点の「登りの遅さ」を解消する方法のひとつでもある。

また、コーチング体制の充実も課題であろう。この２年間、ナショナル・チームでは各選手に個別コーチをつけるよう配慮してきた。また、インカレでも各大学にコーチがつくようになってきた。しかし、各コーチのコーチング法が他のコーチに伝達されることはまだまだ少ない。それ以上に、自分のコーチングがコーチングと呼べるかどうか自信を持たない者が多い。コーチングは人間関係が主体となるため、ある成功例をすぐに一般化することは無理であっても、成功例をいくつか集めることにより、それぞれに共通した部分は探していけるのではないだろうか。技術のコーチング、トレーニングのコーチング、精神的な部分のコーチング等、どのようなコーチングであっても多くの例を出し合って、ＯＬコーチ全体の財産として今後に生かしていく必要を感じている。現在の日本のＯＬ界では、エリートＯＢの能力を活かす道は非常に狭い。もちろん仲間内での能力発揮の例は多くみられるが、それがＯＬ界全体への貢献になっているだろうか。本来なら、身体が動き頭の柔らかい若手エリートＯＢは、県組織や中央組織のメンバーとしてＯＬ界全体のために働いて欲しいし、その能力は十分にあると思うのだが、現実にはその能力を活かすシステムにはなっていない。競技にまだ関心があるのであれば、ぜひ次代の選手育成の立場でＯＬ界に貢献してもらいたいと思う。

もうひとつは、中枢にいる者の「遠くを見る目」である。いつの大会でもそうであるが、今回は特に選手の世代交代について関心を持たざるを得なかった。日本、ニュージーランド等はその成功例であるし、アメリカ、オーストラリア等は大失敗である。あくまで想像であるが、この失敗は選手選考だけの理由でなく、その国のＯＬ界の動きを反映しているように見えてしようがない。日本のＯＬ界が停滞している現実を見ると、次回に日本が失敗する可能性は十分考えられる。多くの日本人は今シーズンしか見ていない。来シーズンを見ている人は大会開催予定者だけではないだろうか。２年後は、５年後は、という視点を持てば、もっと見えて来るものが増え、今から対処できるものも多いのではないだろうか。具体的に言えば、競技的には選手育成であり、大会的にはリレー選手権・ショート選手権であり、ＯＬ界全体では組織システムとその人事などである。

日本代表チームに関与して５年が経過した。２年目から引き際を考えていたが、周囲の声を総合すると、現時点で身を引ける状況ではない。それだけ期待をいただいて、身の引き締まる思いである。これからも、今大会のチーム・マスコット「鯉登り」のように、生き生きと上を目指して進んで行きたい。しかし、この仕事は私やコーチ陣だけでやれるものではない。多くのオリエンティアの皆様の励ましとご援助があってこそ成り立つものである。次回アメリカでの中堅国との競り合いを夢見ながら、今回ご援助下さった皆様に感謝し、なお一層のご厚意をお願いして、第１４回世界選手権の報告を終えたい。

成績表

女子ショート・ディスタンス予選

コース 1 (4300m 95m 12c)

1	Wiebke Karger	GER	32.28
2	M.Lukkarinen	FIN	32.32
3	U.Ornhagen	DEN	32.38
4	C.Bolland	GBR	33.18
5	K.Borg	SWE	33.39
6	A.Hornik	POL	33.57
7	Ada Kucharova	TCH	34.21
8	Marie Idavain	URS	35.33
9	Heidi Arnesen	NOR	36.01
10	Nicki Taws	AUS	36.06
11	K.Federer	USA	36.56
12	A.Horvath	HUN	37.11
13	O.Haberkorn	FRA	38.25
14	D.Hristova	BUL	38.55
15	Katie Fettes	NZL	40.58
16	Brigitte Wolf	SUI	41.04
17	Elena Rampado	ITA	42.54
18	E.Loughman	IRL	44.59
19	Yuko Miyakawa	JPN	46.45
	Mei-chun Kwok	HKG	DISQ.

コース 2 (4350m 95m 12c)

1	J.Cieslarova	TCH	30.45
2	Arja Hannus	SWE	31.47
3	Vroni Konig	SUI	31.49
4	M.V. Bois	FRA	33.33
5	B.Baczek	POL	33.45
6	M.L. Portin	FIN	34.49
7	K.Hellmann	GER	34.54
8	R.K. Gabos	ROM	35.48
9	H.Staugaad	DEN	36.21
10	R.Habenicht	AUT	38.06
11	K.Nagyagi	HUN	39.02
12	C.Marshall	AUS	39.51
13	Una Creagh	IRL	40.04
14	Pam James	CAN	41.36
15	Crystine Lee	USA	43.37
16	H.Bertoldi	ITA	51.51
	R.B.Andersen	NOR	DISQ.
	Yvette Hague	GBR	DISQ.
	Y.Fukushi	JPN	DISQ.
	I.Mikhalko	URS	DISQ.

コース 3 (4300m 100m 12c)

1	C. Blomqvist	SWE	31.20
2	R.Bratberg	NOR	32.14
3	M.Kubatkova	TCH	33.56
4	P.Genova	BUL	34.04
5	Dorte Dahl	DEN	34.44
6	S.Rahkimova	URS	35.03
7	M.Harzenmoser	SUI	35.18
8	Jean Ramsden	GBR	36.42
9	R.Karjalainen	FIN	36.58
10	Reka Toth	HUN	37.00
11	M.L.Gelderman	NZL	37.09
12	Sonia Rodiere	FRA	38.25
13	K.Stratz	GER	38.27
14	C.Kunzel	AUT	38.49
15	J.Gorajska	POL	38.59
16	Yuko Izuta	JPN	41.04
17	Heather Smith	AUS	41.18
18	P.Dickison	USA	43.21
19	D.N.Chalanain	IRL	43.36
20	C.Zorzi	ITA	47.42

コース 4 (4350m 100m 12c)

1	Ursula Oehy	SUI	32.51
2	Heidrun Finke	GER	33.19
3	E.Koskivaara	FIN	34.10
4	M.Jansson	SWE	34.40
5	H.Sandstad	NOR	34.47
6	Petra Novotna	TCH	35.02
7	Monika Bajer	POL	35.24
8	Ede Yumarik	URS	36.10
9	Jenny James	GBR	36.40
10	T.Kamenarova	BUL	36.52
11	C.Thrane	DEN	37.48
12	E.Revesz	ROM	38.40
13	A.M.Piolat	FRA	38.53
14	Jldiko Kovacs	HUN	39.27
15	Jan Davies	NZL	40.14
16	Ljubov Simson	AUS	41.22
17	Paola Bassani	ITA	41.39
18	C.Miyamoto	JPN	43.33
19	C.Morrish	IRL	46.48
20	M.Kuipers	USA	63.55

コース 5 (4250m 100m 12c)

1	F.Schmitt	GER	31.34
2	Marita Skogum	SWE	32.38
3	Katalin Olah	HUN	33.26
4	A.L.Nydal	NOR	34.02
5	Kirsi Tiira	FIN	34.40
6	Chilingirova	BUL	34.52
7	S.Fesseler	SUI	34.57
8	Jana Galikova	TCH	35.19
9	Irina Namovir	URS	35.46
10	Anne Gornicka	POL	36.01
11	L.Fairfax	AUS	36.35
12	J.Soulard	FRA	37.12
13	T.M.Robinson	NZL	37.56
14	Gill Hale	GBR	39.33
15	Silvia Cavini	ITA	43.10
16	S.Crawford	USA	44.17
17	Orla Cooke	IRL	46.34
18	Sanae Kiue	JPN	46.49
19	W.C.Wong	HKG	69.49
	Lone Hansen	DEN	DISQ.

女子ショート決勝 A (5500m 170m 9c)

1.	Jana Cieslarova	TCH	32.09
2.	Ada Kucharova	TCH	32.29
3.	Marita Skogum	SWE	32.41
4.	Christina Blomqvist	SWE	32.59
5.	Katalin Olah	HUN	33.10
6.	Marcela Kubatkova	TCH	33.18
7.	Jana Galikova	TCH	33.24
8.	Marja Liisa Portin	FIN	33.27
9.	Katarina Borg	SWE	33.29
10.	Ulrika Ornhagen	DEN	33.31
11.	Arja Hannus	SWE	33.44
12.	Ragnhild Bratberg	NOR	34.10
13.	Vroni Konig	SUI	34.37
14.	Eija Koskivaara	FIN	34.46
15.	Kirsi Tiira	FIN	35.05
16.	Petra Novotna	TCH	35.14
17.	Marie-Violaine Bois	FRA	35.19
18.	Alicja Hornik	POL	35.23
18.	Dorte Dahl	DEN	35.23
20.	Anne Line Nydal	NOR	35.36
21.	Mari Lukkarinen	FIN	35.45
22.	Frauke Schmitt	GER	35.52
23.	Ede Yumarik	URS	36.06
23.	Marlene Jansson	SWE	36.06
25.	Sabrina Fesseler	SUI	36.12
26.	Pavlina Genova	BUL	36.22
27.	Maja Harzenmoser	SUI	36.36
28.	Hanne Sandstad	NOR	36.42
29.	Wiebke Karger	GER	36.52
30.	Ursula Oehy	SUI	36.55
31.	Heidrun Finke	GER	37.18
32.	Barbara Baczek	POL	37.29
33.	Claire Bolland	GBR	37.33
34.	Anne Gornicka	POL	37.38
35.	Heidi Arnesen	NOR	37.46
36.	Marie Idavain	URS	37.48
37.	Jean Ramsden	GBR	38.09
38.	Nicki Taws	AUS	38.11
39.	Irina Namovir	URS	38.13
40.	Riitta Karjalainen	FIN	38.40
41.	Jenny James	GBR	38.55
42.	Monika Bajer	POL	39.43
43.	Regina Habenicht	AUT	39.52
44.	Kerstin Hellmann	GER	40.28
45.	Todorka Kamenarova	BUL	40.36
46.	Reka Toth	HUN	41.16
47.	Mariela Chilingirova	BUL	43.05
48.	Hanne Staugaad	DEN	43.20
49.	Svetlana Rahkimova	URS	44.36
50.	Reka Katalin Gabos	ROM	45.59

女子ショート決勝 B (5000m 125m 9c)

1.	Katalin Nagyagi	HUN	30.40
2.	Katie Fettes	NZL	31.16
3.	Jldiko Kovacs	HUN	32.42
4.	Brigitte Wolf	SUI	33.14
5.	Kerstin Stratz	GER	33.24
6.	Ljubov Simson	AUS	33.45
7.	Kristin Federer	USA	33.57
8.	Gill Hale	GBR	34.21
9.	Tania M. Robinson	NZL	34.32
10.	Orla Cooke	IRL	35.14
10.	Christine Marshall	AUS	35.14
12.	Sonia Rodiere	FRA	35.29
13.	Charlotte Thrane	DEN	35.45
14.	Una Creagh	IRL	36.34
15.	Dimitrinka Hristova	BUL	36.49
16.	Marquita L. Gelderman	NZL	37.02
17.	Pam James	CAN	37.25
18.	Paola Bassani	ITA	37.41
19.	Elena Rampado	ITA	37.42
20.	Heather Smith	AUS	37.47
21.	Yuko Izuta	JPN	37.51
22.	Elisabete Revesz	ROM	38.07
23.	Deir Ni Challanain	IRL	38.20
24.	Jan Davies	NZL	38.28
25.	Catriona Morrish	IRL	38.34
26.	Andrea Horvath	HUN	38.58
27.	Claudia Kunzel	AUT	39.06
28.	Joanna Gorajska	POL	39.34
29.	Juliette Soulard	FRA	39.42
30.	Eileen Loughman	IRL	39.48
31.	Helga Bertoldi	ITA	40.01
32.	Sanae Kiue	JPN	40.05
33.	Odile Haberkorn	FRA	40.13
34.	Louise Fairfax	AUS	40.49
35.	Silvia Cavini	ITA	42.14
36.	Crystine Lee	USA	42.18
37.	Sharon Crawford	USA	42.36
38.	Peggy Dickison	USA	43.45
39.	Chieko Miyamoto	JPN	44.13
40.	Cristina Zorzi	ITA	45.45
41.	Wai-ching Wong	HKG	48.25
42.	Michelle Kuipers	USA	53.59
	Anne-Marie Piolat	FRA	DISQ.
	Yuko Miyakawa	JPN	DNS

男子ショート・ディスタンス予選

コース 1 (5430m 130m 14c)

1	Alain Berger	SUI	33.08
2	N. Lowegren	SWE	34.01
3	Siksten Sild	URS	35.05
4	F. Jorgensen	DEN	35.15
5	Havard Tveite	NOR	35.46
6	T. De St. Croix	CAN	36.15
7	Falk Hahnel	GER	36.47
7	Ari Anjala	FIN	36.47
9	G. Pavlovics	HUN	37.01
10	Josef Hubacek	TCH	37.37
11	Eric Perrin	FRA	38.30
12	P. Dzambazov	BUL	38.39
13	D. Sacchet	ITA	39.15
14	Eddie Wymer	AUS	39.19
15	M. Gamauf	AUT	40.18
16	M. Szczurek	POL	41.43
17	S. Palmer	GBR	42.16
18	Hughes Petit	BEL	43.57
19	Justin May	IRL	45.07
20	Tom Bruce	USA	46.15
21	R. Yamagishi	JPN	48.17
22	Mark Mc-Kenna	NZL	52.34
23	Amit Wacner	ISR	55.20
24	Sai-hong Yu	HKG	66.54
25	Luis Sergio	POR	72.43

コース 2 (5480m 140m 14c)

1	B. Valstad	NOR	31.14
2	K. Parkkinen	FIN	32.56
3	Rasmus Odum	DEN	34.31
4	F. Billet	FRA	34.53
5	M. Bagness	GBR	35.00
6	R. Stojmenov	BUL	35.12
7	Peter Bonek	AUT	35.59
8	Urs Fluhmann	SUI	36.06
9	V. Alexeev	URS	36.14
10	Petr Kozak	TCH	36.39
11	H. Eriksson	SWE	36.47
12	Jock Davis	AUS	37.16
13	D. Beltremba	ITA	37.25
14	K. Kashimada	JPN	38.30
15	Brian Graham	CAN	39.46
16	L. Taylor	USA	41.28
17	Iwan Vis	BEL	41.34
18	M. Motala	POL	41.47
19	Pal Horvath	HUN	41.56
20	Greg Barbour	NZL	42.16
21	Peter Kernan	IRL	43.24
22	Mihai Veres	ROM	43.46
23	Jens Leibiger	GER	44.27
24	J. G. Ferrer	ESP	52.22
25	M. Alves	POR	53.34

コース 3 (5410m 135m 14c)

1	J. Martensson	SWE	31.05
2	Mika Kuisma	FIN	34.16
3	Jozef Pollak	TCH	34.31
4	A. Leiboms	URS	34.44
5	Daniel Hotz	SUI	34.50
6	M. Thierolf	GER	35.53
7	Zoltan Lantos	HUN	36.29
8	T. Hjerrild	DEN	36.30
9	S. Toussaint	FRA	36.34
10	Rolf Vestre	NOR	36.50
11	S. Murakoshi	JPN	36.55
12	Angel Rusev	BUL	37.11
13	M. Stockmayer	AUT	37.29
14	Rob Plowright	AUS	37.47
15	Santa D. Dalla	ITA	37.54
16	A. Landels	NZL	38.04
17	Roel Reynders	BEL	38.50
18	S. Labuzinski	POL	39.17
19	A. Revesz	ROM	43.48
20	C. O'Halloran	IRL	43.51
21	Bruce Wolfe	USA	46.52
22	Javier Garin	ESP	50.17
23	R. Krohenfied	ISR	51.29
24	E. Martins	POR	83.06
	Mark Chapman	GBR	DISQ.

コース 4 (5420m 135m 15c)

1	M. Johansson	SWE	35.13
2	Tomas Prokes	TCH	35.29
3	C. Aebersold	SUI	36.32
4	R. Mattinen	FIN	36.46
5	Ferri Gassner	AUT	36.54
6	M. Beckers	BEL	37.18
7	P. Thoresen	NOR	37.27
8	F. Mareigner	FRA	37.54
9	A. Mogensen	DEN	38.44
10	A. Luckmann	GER	40.00
11	A. Baccega	ITA	41.00
12	Andy Kitchin	GBR	41.03
13	Z. Makra	HUN	41.15
14	D. Staudte	AUS	41.17
15	D. Rosca	ROM	41.22
16	Z. Hornik	POL	41.56
17	A. Apostolov	BUL	42.29
18	J. Brautigam	USA	47.55
19	T. Yoshida	JPN	49.35
20	Wally Young	IRL	52.18
21	Julio G. Lopez	ESP	56.36
22	Jose Simoes	POR	66.27
	Y. Omeltchenko	URS	DISQ.
	Boris Bauman	YUG	DISQ.
	Robert Jessop	NZL	DISQ.

コース 5 (5410m 135m 14c)

1	V. Lukianov	URS	34.01
2	Peter Ivars	FIN	34.28
3	T. Nielsen	DEN	34.38
4	Kent Olsson	SWE	35.05
5	Richard Jones	GBR	36.05
6	Jiri Hlavac	TCH	36.08
7	Thorsten Lenz	GER	36.35
8	Thomas Buhrer	SUI	36.43
9	F. Viniczai	HUN	36.54
10	P. Moszkowicz	POL	37.06
11	B. Haberkorn	FRA	37.32
12	M. Brantner	AUT	39.00
13	N. O. Duca	ROM	39.22
14	James Logue	IRL	40.48
15	Rick Oliver	USA	41.23
16	Paul Pacque	BEL	41.10
17	Bill Teahan	NZL	42.41
18	K. Nakamura	JPN	43.25
19	Kjetil Bjorlo	NOR	43.40
20	G. Anderluh	YUG	45.20
21	N. Corradini	ITA	46.25
22	James Russell	AUS	49.32
23	F. Pereire	POR	50.43
24	J. M. B. G. Gomez	ESP	55.45
25	K. K. Yeung	HKG	66.36

男子ショート決勝 A (5800m 200m 10c)

1.	Petr Kozak	TCH	29.20
2.	Kent Olsson	SWE	29.57
3.	Martin Johansson	SWE	30.17
4.	Christian Aebersold	SUI	30.22
5.	Jorgen Martensson	SWE	30.33
6.	Urs Fluhmann	SUI	30.34
7.	Niklas Lowegren	SWE	31.00
8.	Mika Kuisma	FIN	31.12
9.	Josef Hubacek	TCH	31.21
10.	Keijo Parkkinen	FIN	31.39
11.	Bjornar Valstad	NOR	31.44
12.	Petter Thoresen	NOR	31.46
13.	Tomas Prokes	TCH	31.51
14.	Jozef Pollak	TCH	32.32
15.	Ari Anjala	FIN	32.36
16.	Gabor Pavlovics	HUN	32.47
16.	Ferri Gassner	AUT	32.47
18.	Rasmus Odum	DEN	32.49
19.	Jiri Hlavac	TCH	32.57
19.	Alain Berger	SUI	32.57
21.	Vladimir Alexeev	URS	32.59
22.	Thomas Nielsen	DEN	33.03
23.	Martin Bagness	GBR	33.08
24.	Rumen Stojmenov	BUL	33.09
25.	Aicars Leiboms	URS	33.17
26.	Valerian Lukianov	URS	33.18
27.	Thomas Buhrer	SUI	33.23
28.	Flemming Jorgensen	DEN	33.26
29.	Michael Thierolf	GER	33.31
30.	Andreas Luckmann	GER	43.32
31.	Thorsten Lenz	GER	33.43
32.	Zoltan Lantos	HUN	33.51
33.	Richard Jones	GBR	33.58
34.	Thomas Hjerrild	DEN	34.11
35.	Reijo Mattinen	FIN	34.16
36.	Havard Tveite	NOR	34.17
37.	Daniel Hotz	SUI	34.35
38.	Siksten Sild	URS	34.43
39.	Pawel Moszkowicz	POL	34.44
40.	Peter Ivars	FIN	34.53
41.	Ted De St.Croix	CAN	35.19
42.	Peter Bonek	AUT	35.56
43.	Frederic Billet	FRA	36.04
44.	Allan Mogensen	DEN	37.03
45.	Stephane Toussaint	FRA	37.54
46.	Falk Hahnel	GER	38.02
47.	Ferenc Viniczai	HUN	38.18
48.	Rolf Vestre	NOR	38.23
49.	Martin Beckers	BEL	39.45
50.	Franz Mareigner	FRA	42.04

男子ショート決勝 B (5800m 170m 9c)

1.	Manfred Stockmayer	AUT	33.13
2.	Dario Beltremba	ITA	35.23
3.	Manfred Gamauf	AUT	35.48
4.	Rob Plowright	AUS	35.50
5.	Martin Brantner	AUT	35.52
6.	Daniele Sacchet	ITA	36.21
7.	Alistair Landels	NZL	36.47
7.	Eddie Wymer	AUS	36.47
9.	Brian Graham	CAN	36.56
10.	Kjetil Bjorlo	NOR	37.03
11.	Antonio Baccega	ITA	37.13
12.	Shin Murakoshi	JPN	37.25
13.	Dionisie Rosca	ROM	37.52
14.	Greg Barbour	NZL	37.53
15.	Koji Kashimada	JPN	37.58
15.	Slawomir Labuzinski	POL	37.58
17.	Angel Rusev	BUL	38.14
18.	Nicolae Ovidiu Duca	ROM	38.30
19.	James Logue	IRL	38.48
20.	Michal Motala	POL	39.00
21.	Colm O'Halloran	IRL	39.12
22.	Aleksandar Apostolov	BUL	39.14
23.	Plamen Dzambazov	BUL	39.28
24.	Andreas Revesz	ROM	39.37
24.	Eric Perrin	FRA	39.37
26.	Iwan Vis	BEL	40.05
27.	Zsigmond Makra	HUN	40.06
27.	Jock Davis	AUS	40.06
29.	Hughes Petit	BEL	40.45
29.	Donald Staudte	AUS	40.45
31.	Lansing Taylor	USA	41.16
32.	Miroslaw Szczurek	POL	41.28
33.	Bruno Haberkorn	FRA	41.33
34.	Tsutomu Yoshida	JPN	42.08
35.	Roel Reynders	BEL	42.14
36.	Zbigniew Hornik	POL	42.48
37.	Gregor Anderluh	YUG	43.12
38.	Santa Dennis Dalla	ITA	43.20
39.	Justin May	IRL	44.04
40.	Tom Bruce	USA	44.30
41.	Rick Oliver	USA	45.14
42.	Wally Young	IRL	45.28
43.	Bill Teahan	NZL	48.10
44.	Paul Pacque	BEL	49.44
45.	Joseph Brautigam	USA	19.50
46.	Kotaro Nakamura	JPN	51.18
47.	Stephen Palmer	GBR	67.25
	Hakan Eriksson	SWE	DISQ.
	Pal Horvath	HUN	DISQ.

男子ショート決勝 C (5500m 160m 9c)

1.	Jens Leibiger	GER	33.00
2.	Nicolo Corradini	ITA	35.16
3.	Peter Kernan	IRL	37.15
4.	Mihai Veres	ROM	37.40
5.	James Russell	AUS	37.58
6.	Bruce Wolfe	USA	38.48
7.	Rinya Yamagisi	JPN	39.23
8.	Eurico Martins	POR	40.28
9.	Mark Mc-Kenna	NZL	41.12
10.	Javier G.Ferrer	ESP	43.13
11.	Javier Garin	ESP	45.18
12.	Julio G.Lopez	ESP	46.14
13.	Amit Wacner	ISR	46.16
14.	Kwok-keung Yeung	HKG	46.49
15.	Luis Sergio	POR	47.09
16.	Jesus M.B.G.Gomez	ESP	47.17
17.	Jose Simoes	POR	50.20
18.	Raviv Krohenfied	ISR	51.20
19.	Francisco Pereire	POR	52.37
20.	Sai-hong Yu	HKG	53.51
21.	Maximiano Alves	POR	57.19

女子個人クラシック決勝　(10520m　420m　16c)

1,	Katalin Olah	HUN	79.52
2,	Christina Blomqvist	SWE	81.04
3,	Jana Galikova	TCH	81.18
4,	Jana·Cieslarova	TCH	81.54
5,	Marita Skogum	SWE	82.15
6,	Ragnhild Bratberg	NOR	83.56
7,	Ragnhild B.Andersen	NOR	84.11
8,	Katarina Borg	SWE	87.05
9,	Marcela Kubatkova	TCH	87.09
10,	Katie Fettes	NZL	87.13
11,	Marja Liisa Portin	FIN	87.40
12,	Arja Hannus	SWE	87.45
13,	Marie-Violaine Bois	FRA	89.00
14,	Charlotte Thrane	DEN	90.05
15,	Kirsi Tiira	FIN	90.17
16,	Frauke Schmitt	GER	90.19
17,	Irina Namovir	URS	90.34
18,	Mari Lukkarinen	FIN	90.51
19,	Petra Novotna	TCH	90.57
20,	Brigitte Wolf	SUI	91.39
21,	Ulrika Ornhagen	DEN	91.48
22,	Eija Koskivaara	FIN	92.23
23,	Sabrina Fesseler	SUI	92.26
24,	Hanne Sandstad	NOR	93.01
25,	Yvette Hague	GBR	93.11
26,	Claire Bolland	GBR	93.13
27,	Christine Marshall	AUS	93.17
28,	Andrea Horvath	HUN	93.23
29,	Vroni Konig	SUI	94.54
30,	Wiebke Karger	GER	95.23
31,	Anne Gornicka	POL	96.11
32,	Svetlana Rahkimova	URS	96.45
33,	Heidi Arnesen	NOR	96.58
34,	Pavlina Genova	BUL	97.23
35,	Todorka Kamenarova	BUL	97.45
36,	Alicja Hornik	POL	98.44
37,	Nicki Taws	AUS	98.57
38,	Ede Yumarik	URS	100.07
39,	Maja Harzenmoser	SUI	101.47
40,	Marie Idavain	URS	101.53
41,	Tania M. Robinson	NZL	104.16
42,	Elisabete Revesz	ROM	104.34
43,	Regina Habenicht	AUT	106.18
44,	Odile Haberkorn	FRA	111.46
45,	Pam James	CAN	116.55
46,	Claudia Kunzel	AUT	117.51
47,	Elena Rampado	ITA	117.59
48,	Paola Bassani	ITA	119.55
49,	Reka Katalin Gabos	ROM	120.26
50,	Mariela Chilingirova	BUL	120.35
51,	Yuko Izuta	JPN	121.56
52,	Deir Ni Challanain	IRL	123.47
53,	Peggy Dickison	USA	124.09
54,	Sharon Crawford	USA	133.07
55,	Yuko Miyakawa	JPN	133.16
56,	Una Creagh	IRL	145.50
57,	Wai-ching Wong	HKG	165.56
58,	Mei-chun Kwok	HKG	196.10

参加国略称一覧

AUS = ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	AUT = ｵｰｽﾄﾘｱ	BEL = ﾍﾞﾙｷﾞｰ	BUL = ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ	CAN = ｶﾅﾀﾞ
DEN = ﾃﾞﾝﾏｰｸ	ESP = ｽﾍﾟｲﾝ	FIN = ﾌｨﾝﾗﾝﾄﾞ	FRA = ﾌﾗﾝｽ	GBR = ｲｷﾞﾘｽ
GER = ﾄﾞｲﾂ	HKG = ﾎﾝｺﾝ	HUN = ﾊﾝｶﾞﾘｰ	IRL = ｱｲﾙﾗﾝﾄﾞ	ISR = ｲｽﾗｴﾙ
ITA = ｲﾀﾘｱ	JPN = ﾆｯﾎﾟﾝ	NOR = ﾉﾙｳｪｰ	NZL = ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ	POL = ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞ
POR = ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ	ROM = ﾙｰﾏﾆｱ	SUI = ｽｲｽ	SWE = ｽｳｪｰﾃﾞﾝ	TCH = ﾁｪｺ
URS = ｿﾋﾞｴﾄ	USA = ｱﾒﾘｶ	YUG = ﾕｰｺﾞ		

男子個人クラシック決勝 (17470m 645m 25c)

1.	Jorgen Martensson	SWE	109.25
2.	Kent Olsson	SWE	113.37
3.	Siksten Sild	URS	113.48
4.	Vladimir Alexeev	URS	114.09
5	Hakan Eriksson	SWE	114.32
6.	Christian Aebersold	SUI	114.45
7.	Havard Tveite	NOR	115.10
8.	Josef Hubacek	TCH	116.09
9.	Flemming Jorgensen	DEN	116.18
10.	Rolf Vestre	NOR	116.30
11.	Urs Fluhmann	SUI	116.46
12.	Daniel Hotz	SUI	116.48
13.	Tomas Prokes	TCH	117.12
14.	Ari Anjala	FIN	117.18
15.	Bjornar Valstad	NOR	117.50
16.	Thomas Hjerrild	DEN	115.52
17.	Mika Kuisma	FIN	118.26
18.	Valerian Lukianov	URS	118.56
19.	Reijo Mattinen	FIN	119.59
20.	Richard Jones	GBR	120.09
21.	Aicars Leiboms	URS	120.27
22.	Niklas Lowegren	SWE	121.33
23.	Andreas Luckmann	GER	122.08
24.	Ferri Gassner	AUT	122.17
25.	Rumen Stojmenov	BUL	122.19
26.	Ferenc Viniczai	HUN	122.38
27.	Petr Kozak	TCH	122.39
28.	Petter Thoresen	NOR	123.05
29.	Martin Bagness	GBR	123.08
30.	Alistair Landels	NZL	123.25
31.	Thomas Buhrer	SUI	123.29
32.	Zoltan Lantos	HUN	125.44
33.	Michal Motala	POL	126.20
34.	Rasmus Odum	DEN	127.02
35.	Allan Mogensen	DEN	128.24
36.	Gabor Pavlovics	HUN	129.01
37.	Plamen Dzambazov	BUL	129.37
38.	Michael Thierolf	GER	130.16
39.	Greg Barbour	NZL	132.20
40.	Stephen Palmer	GBR	132.49
41.	Eddie Wymer	AUS	132.56
42.	Miroslaw Szczurek	POL	133.03
43.	Jock Davis	AUS	133.13
44.	Andy Kitchin	GBR	135.27
45.	Bruno Haberkorn	FRA	138.14
46.	Ted De St.Croix	CAN	138.16
47.	Daniele Sacchet	ITA	138.19
48.	Manfred Gamauf	AUT	139.14
49.	Brian Graham	CAN	142.49
50.	Koji Kashimada	JPN	143.15
51.	Nicolae Ovidiu Duca	ROM	144.35
52.	Mihai Veres	ROM	147.54
53.	Stephane Toussaint	FRA	153.41
54.	Franz Mareigner	FRA	153.43
55.	Nicolo Corradini	ITA	155.34
56.	Colm O'Halloran	IRL	155.52
57.	Boris Bauman	YUG	158.17
58.	Gregor Anderluh	YUG	161.09
59.	Iwan Vis	BEL	162.20
60.	Tsutomu Yoshida	JPN	166.06
61.	Bruce Wolfe	USA	170.45
62.	Rick Oliver	USA	171.43
63.	Justin May	IRL	173.54
64.	Paul Pacque	BEL	175.52
65.	Jose Simoes	POR	178.26
66.	Raviv Krohenfied	ISR	181.34
67.	Amit Wacner	ISR	186.27
68.	Julio G.Lopez	ESP	203.50
69.	Jesus M.B.G.Gomez	ESP	216.27
70.	Sai-hong Yu	HKG	222.02
71.	Kwok-keung Yeung	HKG	227.08
	Peter Ivars	FIN	DISQ.

女子リレー （7200-7400m x 4）

1，スウェーデン		SWE
Arja Hannus	57.00	57.00
C. Blomqvist	53.55	110.55
Marlene Jansson	55.07	166.03
Marita Skogum	52.24	218.27

2，ノルウェー		NOR
Hanne Sandstad	57.27	57.27
Heidi Arnesen	57.10	114.38
R. Bratberg	51.44	166.22
R.B. Andersen	53.57	220.20

3，チェコ		TCH
M. Kubatkova	60.02	60.02
Jana Galikova	54.21	114.23
Ada Kucharova	53.27	167.50
Jana Cieslarova	55.38	223.29

4，ハンガリー		HUN
Andrea Horvath	60.10	60.10
Reka Toth	56.17	116.27
Jldiko Kovacs	60.58	177.26
Katalin Olah	53.49	231.15

5，フィンランド		FIN
M. Lukkarinen	65.45	65.45
Kirsi Tiira	60.43	126.28
E. Koskivaara	57.04	183.32
M. L. Portin	56.15	239.47

6，スイス		SUI
Ursula Oehy	73.52	73.52
S. Fesseler	59.46	133.38
Vroni Konig	57.59	191.37
Brigitte Wolf	57.52	249.30

7，ドイツ		GER
K. Hellmann	61.44	61.44
Heidrun Finke	58.44	120.29
Frauke Schmitt	61.05	181.35
Kerstin Stratz	69.58	251.34

8，イギリス		GBR
Claire Bolland	69.22	69.22
Jenny James	60.17	129.40
Jean Ramsden	65.41	195.21
Yvette Hague	56.24	251.46

9，ソ連		URS
Irina Mikhalko	65.22	65.22
Irina Namovir	63.36	128.59
S. Rahkimova	66.39	195.38
Ede Yumarik	57.13	252.51

10，オーストラリア		AUS
Nicki Taws	60.02	60.02
Louise Fairfax	62.28	122.31
C. Marshall	58.56	181.27
Ljubov Simson	71.50	253.17

11，ブルガリア		BUL
D. Hristova	69.52	69.52
Pavlina Genova	63.57	133.49
M. Chilingirova	61.24	195.14
T. Kamenarova	60.28	255.43

12，デンマーク		DEN
C. Thrane	57.34	57.34
Lone Hansen	67.30	125.05
Hanne Staugaad	66.42	191.47
U. Ornhagen	65.29	257.16

13，ポーランド		POL
Alicja Hornik	60.08	60.08
Monika Bajer	66.24	126.32
Anne Gornicka	65.37	192.09
Barbara Baczek	66.37	258.46

14，フランス		FRA
M.V. Bois	56.45	56.45
A.M. Piolat	69.46	126.32
J. Soulard	65.34	192.06
Sonia Rodiere	66.49	258.56

15，ニュージーランド		NZL
Katie Fettes	56.51	56.51
T.M. Robinson	69.21	126.13
M.L. Gelderman	75.31	201.45
Jan Davies	74.07	275.52

16，イタリア		ITA
Elena Rampado	78.20	78.20
Silvia Cavini	77.29	155.50
Cristina Zorzi	84.18	240.08
Paola Bassani	77.52	318.00

17，アイルランド		IRL
D.N.Challanain	80.55	80.55
Una Creagh	95.23	176.18
Orla Cooke	71.24	247.42
E. Loughman	84.23	332.05

18，日本		JPN
Sanae Kiue	72.01	72.01
C. Miyamoto	91.55	163.57
Yuko Izuta	88.12	253.09
Y. Fukushi	93.49	346.58

19，アメリカ		USA
K. Federer	80.34	80.34
Peggy Dickison	86.24	166.59
Crystine Lee	96.19	263.19
M. Kuipers	9*.**	35*.**

男子リレー （ 11300-11500m x 4 ）

1，スイス		SUI	9，デンマーク		DEN	17，オーストラリア		AUS
Thomas Buhrer	70.24	70.24	Thomas Nielsen	81.07	81.07	Rob Plowright	84.25	84.25
Alain Berger	78.01	148.25	Rasmus Odum	81.11	162.18	Eddie Wymer	85.52	170.17
Urs Fluhmann	67.03	215.28	Thomas Hjerrild	76.44	239.02	James Russell	96.01	266.18
C. Aebersold	67.08	282.37	Allan Mogensen	74.54	313.56	Jock Davis	82.23	348.41
2，ノルウェー		NOR	10，ブルガリア		BUL	18，日本		JPN
Petter Thoresen	70.51	70.51	Rumen Stojmenov	76.00	76.00	Shin Murakoshi	79.03	79.03
Bjornar Valstad	72.21	143.13	A. Apostolov	87.24	163.25	Koji Kasimada	83.19	162.22
Rolf Vestre	70.37	213.51	Angel Rusev	80.45	244.11	Kotaro Nakamura	94.37	256.59
Havard Tveite	69.08	282.59	P. Dzambazov	75.36	319.47	Rinya Yamagisi	93.40	350.39
3，フィンランド		FIN	11，ニュージーランド		NZL	19，アメリカ		USA
Reijo Mattinen	69.47	69.47	A. Landels	71.47	71.47	Tom Bruce	89.39	89.39
Ari Anjala	73.40	143.27	Robert Jessop	80.56	152.43	Lansing Taylor	101.25	191.04
Mika Kuisma	71.41	215.09	Bill Teahan	88.19	241.03	Bruce Wolfe	98.09	289.13
K. Parkkinen	69.09	284.18	Greg Barbour	81.15	322.18	J. Brautigam	**.**	***.**
4，スウェーデン		SWE	12，ポーランド		POL	20，アイルランド		IRL
M. Johansson	78.09	78.09	Z. Hornik	80.39	80.39	Wally Young	109.40	109.40
Kent Olsson	71.13	149.22	S. Labuzinski	83.25	164.04	C. O'Halloran	98.11	207.52
J. Martensson	66.08	215.31	P. Moszkowicz	83.23	247.28	Peter Kernan	95.09	303.01
Hakan Eriksson	70.42	286.13	Michal Motala	79.53	327.21	James Logue	**.**	***.**
5，ソ連		URS	13，オーストリア		AUT	21，ベルギー		BEL
Siksten Sild	71.31	71.31	M. Stockmayer	74.51	74.51	Hughes Petit	89.43	89.43
Aicars Leiboms	72.59	144.31	Peter Bonek	83.31	158.23	Martin Beckers	110.12	199.56
V. Lukianov	70.43	215.15	Martin Brantner	80.53	239.17	Roel Reynders	89.35	289.31
V. Alexeev	72.47	288.02	Ferri Gassner	88.06	327.23	Iwan Vis	**.**	***.**
6，チェコ		TCH	14，イタリア		ITA	(失) スペイン		ESP
Tomas Prokes	69.49	69.49	Antonio Baccega	76.27	76.27	Javier Garin	104.31	104.31
Josef Hubacek	73.27	143.17	Daniele Sacchet	81.38	158.05	J. G. Ferrer	141.35	246.07
Jozef Pollak	77.14	220.32	S. Dennis Dalla	86.36	244.42	Julio G.Lopez	112.53	359.00
Jiri Hlavac	75.46	296.18	Dario Beltremba	84.08	328.50	J.M.B.G.Gomez	UM START	
7，イギリス		GBR	15，フランス		FRA	(失) ポルトガル		POR
Richard Jones	71.46	71.46	Frederic Billet	80.56	80.56	F. Pereire	122.14	122.14
Stephen Palmer	75.18	147.04	Eric Perrin	82.57	163.54	Luis Sergio	116.27	237.42
Martin Bagness	74.47	221.52	S. Toussaint	83.15	247.09	M. Alves	***.**	***.**
Andy Kitchin	79.50	301.43	Franz Mareigner	98.07	345.16	Eurico Martins	UM START	
8，ハンガリー		HUN	16，ルーマニア		ROM	(失) ドイツ (ミス P)		GER
Ferenc Viniczai	78.23	78.23	N. O. Duca	74.51	74.51	Falk Hahnel	78.50	78.50
Gabor Pavlovics	70.48	149.12	Andreas Revesz	89.19	164.10	A. Luckmann	74.32	153.23
Pal Horvath	79.29	228.41	Dionisie Rosca	94.57	259.08	Jens Leibiger	(85.47	239.10)
Zoltan Lantos	76.44	305.25	Mihai Veres	86.10	345.18	M. Thierolf	(86.12	325.22)

リレー途中経過　《数字は積算タイムおよび日本との時間差、単位は分（秒は切捨て）》

女子

	1走		2走		3走		4走	
1,	FRA(56)	15	SWE(110)	53	SWE(166)	87	SWE(218)	129
2,	NZL(56)	15	TCH(114)	49	NOR(166)	86	NOR(220)	127
3,	SWE(57)	15	NOR(114)	49	TCH(167)	85	TCH(223)	124
4,	NOR(57)	14	HUN(116)	47	HUN(177)	75	HUN(231)	116
5,	DEN(57)	14	GER(120)	43	AUS(181)	71	FIN(239)	108
6,	TCH(60)	11	AUS(122)	41	GER(181)	71	SUI(249)	98
7,	AUS(60)	11	DEN(125)	38	FIN(183)	69	GER(251)	96
8,	POL(60)	11	NZL(126)	37	SUI(191)	62	GBR(251)	96
9,	HUN(60)	11	FIN(126)	37	DEN(191)	62	URS(252)	95
10,	GER(61)	10	FRA(126)	37	FRA(192)	61	AUS(253)	94
11,	URS(65)	6	POL(126)	37	POL(192)	60	BUL(255)	92
12,	FIN(65)	6	URS(128)	34	BUL(195)	57	DEN(257)	90
13,	GBR(69)	2	GBR(129)	34	GBR(195)	57	POL(258)	89
14,	BUL(69)	2	SUI(133)	30	URS(195)	57	FRA(258)	89
15,	日　本(72)		BUL(133)	30	NZL(201)	51	NZL(275)	72
16,	SUI(73)	1	ITA(155)	8	ITA(240)	13	ITA(318)	29
17,	ITA(78)	6	日　本(163)		IRL(247)	5	IRL(332)	15
18,	USA(80)	8	USA(166)	3	日　本(253)		日　本(346)	
19,	IRL(80)	8	IRL(176)	12	USA(263)	10	USA(35*)	1*

男子

	1走		2走		3走		4走	
1,	FIN(69)	9	NOR(143)	19	NOR(213)	43	SUI(282)	67
2,	TCH(69)	9	TCH(143)	19	FIN(215)	41	NOR(282)	67
3,	SUI(70)	8	FIN(143)	18	URS(215)	41	FIN(284)	66
4,	NOR(70)	8	URS(144)	17	SUI(215)	41	SWE(286)	64
5,	URS(71)	7	GBR(147)	15	SWE(215)	41	URS(288)	62
6,	GBR(71)	7	SUI(148)	14	TCH(220)	36	TCH(296)	54
7,	NZL(71)	7	HUN(149)	13	GBR(221)	35	GBR(301)	48
8,	ROM(74)	4	SWE(149)	13	HUN(228)	28	HUN(305)	45
9,	AUT(74)	4	NZL(152)	9	DEN(239)	17	DEN(313)	36
10,	BUL(76)	3	GER(153)	9	AUT(239)	17	BUL(319)	30
11,	ITA(76)	2	ITA(158)	4	NZL(241)	15	NZL(322)	28
12,	SWE(78)	0	AUT(158)	4	BUL(244)	12	POL(327)	23
13,	HUN(78)	0	DEN(162)	0	ITA(244)	12	AUT(327)	23
14,	GER(78)	0	日　本(162)		FRA(247)	9	ITA(328)	21
15,	日　本(79)		BUL(163)	1	POL(247)	9	FRA(345)	5
16,	POL(80)	1	FRA(163)	1	日　本(256)		ROM(345)	5
17,	FRA(80)	1	POL(164)	1	ROM(259)	2	AUS(348)	2
18,	DEN(81)	2	ROM(164)	1	AUS(266)	9	日　本(350)	
19,	AUS(84)	5	AUS(170)	7	USA(289)	32	USA(***)	
20,	USA(89)	10	USA(191)	28	BEL(289)	32	IRL(***)	
21,	BEL(89)	10	BEL(199)	37	IRL(303)	46	BEL(***)	
22,	ESP(104)	25	IRL(207)	45	ESP(359)	103	xESP(---)	
23,	IRL(109)	29	POR(237)	75	POR(***)		xPOR(---)	
24,	POR(122)	43	ESP(246)	83	xGER(239)		xGER(325)	

第１４回
世界オリエンテーリング選手権大会
報告書

１９９１年９月

編集・発行責任者　橋　直隆
茨城県つくば市松代 4-407-105
TEL 0298-55-1799
印刷所　株式会社　イセブ
茨城県つくば市天久保 2-11-20
TEL 0298-51-2515